

第6回 被災地に学ぶ会

「被災地という場をお借りして

人としての生き方を学ぶ会」

活動報告



石巻市 小湊浜（牡鹿半島）

2011.11.18－11.20

【第6回 被災地に学ぶ会 行程表】

11月18日(金)	18:30	JR尼崎駅 南側バスロータリー 受付					
	19:00	バス発車 → 自己紹介					
	20:30	滋賀県多賀SA(20分休憩) = 滋賀(1名)・京都(1名)合流					
19日(土)	8:30	牡鹿ボランティアセンター到着 → 活動開始					
	15:30	牡鹿での活動終了→牡鹿仮設商店街散策					
	16:30	バス出発					
	18:00	大川小学校到着→ご冥福をお祈りする					
	18:20	出発					
	18:30	道の駅(上品の湯)入浴+夕食=2時間					
	20:30	バス出発(帰路)					
20日(日)	9:00	JR尼崎到着 解散					
参加人数	44		教師	23		10代	2
女性	11		一般	6		20代	23
男性	33		大学生	15		30代	7
						40代	11
						50代	1

第六回「被災地に学ぶ会」体験記

★★兵庫県20代 女性★★

金曜日の3時半に学校を出て同僚の先生と2人で、集合場所の尼崎に向かいました。メンバーは45人。行きのバスでは自己紹介がありました。志高い皆様は、本当に気持ちがつまった自己紹介をされます。それだけで大きな学びでした。

石巻に着いたらボランティアセンターにて、指示を受けます。今回は牡鹿半島での瓦礫撤去でした。現場は大きな沼でした。自分の身長を超えるほどの大きなススキなどの植物が生い茂り、その周辺に瓦礫が散らばっています。元々は田んぼだったということで、足場はかなりぬかるんでいました。しかも、雨が降る中での作業でした。まずは、瓦礫の撤去の邪魔になる植物を刈ることから始めました。その幹は物凄く太く一つ刈るのに時間がかかりました。

そうしているうちに集合の合図があり、道路に上がりました。するとそこに傘をさし、作業の様子をじつと眺めている一人のおじさんが立っておられました。服装から、その方がボランティアの方でないこと、その表情から、被災者の方ではないかということがわかりました。ボランティア全員でそのおじさんの話に耳を傾けました。

「私の家は、あのあたりでした。津波がきたとき、

私の妻は家の方について津波にのみこまれて今だに行方不明です。今まで自衛隊とかいろいろと探してもらったけど見つからん。今日はボランティアさんがくると聞いてあのあたりをずっと見てもらえんかと思って。うちは海苔の業者をしとつたからその工具でもあれば…」

おじさんの携帯の待ち受けには笑顔の奥様の写真がありました。私たちが作業をする中おじさんは、傘をさして道路の上からじつと私たちの作業現場を見つめておられました。おじさんは、きつと毎日あんな風に沼を見つめておられたのかもしれない。探してくれる人はずっと待っておられたのではないかなと感じました。

今回の作業現場には、約200人ほどの方が日本各地からきておられました。現場が広かった。泥と油の田んぼで、足場が非常に悪かった。泥臭い匂い。瓦礫は、多くて重いものがたくさんあった。この現場にボランティアが入るのは始めてで8ヶ月たった今でもまったく手付かずの状態。ペシャンコになってひっくりかえっている車。ギター。扇風機。牡蠣の養殖用に貝殻をいくつもいくつも重ねたもの。(かなり重い)畳などなど、山ほどありました。しかも天気は、雨でした。そんな中、ひたすら落ちているものを拾っては運びます。私は泥の中に、白い布のようなものを見つけました。引っ張ってみると、びくともしません。こ

れは無理かもしれないと思っていると近くの人が、一緒に引っ張ってくださいました。けれども、出てきません。するとまた、違うひとがやってきて力をかけて下さいました。でも泥の下敷きになった布は、なかなか出てきません。泥をどけて引っ張って引っかかっている紐をほじき、また引っ張って泥をどけて。最後にドドドッと、でてきた布はテントの屋根のような大きなものでした。ふとその布を持っている人々を見ると、私と違ったネームプレートをしている。その隣の人はまだ違ったネームプレート。その隣の人々は、お揃いのタオルを持っている。そのまた横の人は、ネームプレートもない。みんな、それぞれに違った団体の方々でした。みんな、笑顔でした。ここを綺麗にする。一つの目的のために、自分の所属に関係なく、手を差し伸べる。みんなが力を合わせるこつと素晴らしいなと実感することができました。

今回も、最後に大川小学校に行かせていただきました。今回はあえて日が落ちた後、暗闇の中で祭壇の前に立つことを計画してくださいました。私は祭壇の前で手を合わせ、大津波にのみこまれて行くときの子どもたちの思いに寄り添おうと思いました。心を落ち着けて、向かい合おう、向かい合おうと。けれども、何もわかりませんでした。祭壇に飾られたお母さんから、今まだ見つ

らない子どもへの手紙を読みました。そして、お母さんの辛さを感じようと思いました。けれども、何もわかりませんでした。その時、大谷先生が裏山を見てくださいと言われました。あの大津波警報の中で教師は判断を迫られていました。避難場所になっている、学校より6 m高い場所の堤防へ向かうか、裏手の山に登るのか。結局、報道にもあったように、堤防に向かうと決めたために津波に襲われてしまわれたのです。けれども、その裏山は、とても全校生徒がましてや、1年生が登れるようなものではないことが目でみてはつきりとわかりました。普段は行つては行けないと指導がされているような急斜面です。それを見たときに、ふと大川小学校の先生たちの気持ちが心に浮かんできました。

「くやしい。くやしい。でも、どうすることもできなかつた。」

その言葉が、頭の中で何度も繰り返されて、しばらく涙が止まりませんでした。

【かりゆし58】の「さよなら」という曲の歌詞が浮かんできます。

ぼくの生きる今日は

もっと生きたかった誰かの

明日かもしれないのだから

そう思つて毎日を生きていこう。それが、今回の私の一番の学びです。この学びを支えて下さったたくさんの方々的心から感謝いたします。ありがとうございました。

★★奈良県30代 男性★★

今回、初めて「被災地に学ぶ会」に参加させていただきました。参加させていただいて思いでした。自分は何もしていないという思いです。「被災地に学ぶ会」や「日本を美しくする会」のご支援に、ただ乗っからせていただいただけ。草を刈ったり、瓦礫を拾わせていただいたり、「した」のではなく、させていただく環境にあったというのが正直な感想です。「被災地に学ぶ会」や「日本を美しくする会」、また、ベストコンディションで現地までの送迎に懸命に運転してくださったバスの運転手さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

私が今回、向かわせていただいたのは元々、田んぼがあつたという水田地帯の瓦礫を拾わせてもらうという作業です。開始する以前に、大谷先生より「瓦礫であつて、瓦礫ではないんです。色んな人の想いがあります。急がず丁寧に」と言う言葉を胸に抱いて活動を開始しました。多くのことを感じました。最初は草を刈る作業。正直、果

てしない量があるなと思つたのですが、同時に思いましたのが田んぼというのは一朝一夕で出来るものではない。ここにあつたとされる田んぼは、それこそ、多くの祖先から受け継がれ積み重ねて来られたもの。それが津波によって一瞬にして、奪われてしまったのだなと思うと、果てしなく感じた草の数々は、そんなにたいしたものではない。むしろ、これから復興されて行くお手伝いをさせていただけることに、感謝の気持ちが湧いてきました。

休憩をはさんだ後は瓦礫を拾わせていただきました。印象として凄く残っているのが大阪産業大学の宮崎先生が、子供のキャップを大事そうに拾っていたシーンでした。私は独身で子供もおりませんが、甥や姪がおります。宮崎先生が拾われたキャップは、姪が被っていたのと似ていたものでしたから、心が痛みました。おそらく、宮崎先生もその想いがあつたからこそ、大事に拾われていたのではないかと思います。

午後の瓦礫拾いではバケツリレーのように、皆さんでつなぎました。人と人が協力する美しさを感じましたし、日本人にはこういう素晴らしさがあるのだと再確認しました。さらに、飛び入りに参加してきた現地の方もおられました。おそらく、仕事帰りだったと思いますが、その姿、行動力は、被災地に足を運ぶことを決っていた自分に

欠けていたものを痛切に感じました。

瓦礫を拾わせて頂いた時間は僕にとってはすごく貴重な体験になりました。それだけでも凄い経験だったのですが、大川小学校に立ち寄りさせていただいた時は、全ての感情が吹き飛ぶくらい衝撃を受けました。大川小学校は7割の児童が津波の犠牲になったと聞きました。言葉は悪いですが、廃墟に見えた学校が、津波の恐ろしさを伝えていました。その光景は、どんな腕利きのカメラマンやフォトグラファーにも伝えられないものでありました。津波のことは、ニュースや新聞などで拝見してきましたが、日本にどれだけ災害が起きたということを知っていたつもりでしたけど、僕は何も知らなかったなど。慰霊碑には、子供さんを失くされたお母さんのお子さんにあてた手紙が飾ってありました。言葉にならなかったです。肉眼で見ることでは感じることができない、東日本大震災の現実だったと思います。先ほども甥や姪がいると書きましたが、私は、朝、甥と小学校の周りをジョギングしているのですが、彼との時間が失われたらどんな気持ちがあるか。実際に、失われた親御さんたちのことを思うと…胸が締め付けられました。

私の仕事の話になりますが、今年の夏、高校野球の取材をしているときに、こんなことがありました。壮大な応援をしていた相手の印象を聞かれ

た、ある監督さんが、TVのインタビュにて「津波が押し寄せてくるようでした」と表現されたのです。そう発言されたこと自体、疑うのですが、ただ、これが現状なのではないかなという想いもするのです。発言されたのは、被災地から遠く離れた西の地方の学校の監督さんでした。地震・津波のニュースを知っているつもりでも、実は、本当のところの、津波のことや怖さ、被害に遭った人の状況などを理解していないのだ、と。私が、そのような発言をするわけでも、肯定するつもりもありませんが、「分かっていない」という部分に置いては、実は、そんなに変わらないのではないかとこの気持ちがありました。

今回、「被災地に学ぶ会」に参加させていただき、学び得たのはその現状でもあるかなと思います。自分は、東日本大震災のことを分かっていた。この現状から目をそむけることは、今を生きる人間としては、決してはあつてはならぬことだという強く思います。このたびの、東日本を襲った震災から、何を学び得ていくべきなのか、日本人として、そのことを問いかけながら生きていこうと思います。

★★大阪府40代 男性★★

東北に向かうバスの窓に頭を傾けて目を閉じ

ると、冷たい夜の空気を切るピューピューというリズムカルな音が響いてきました。尼崎から被災地へと続く高速道路をひた走るバスの中で、私は600km以上も先の被災地のことを想っていました。しかし、夜明けに私の目に飛び込んできた石巻の町の姿は、私の想像をはるかに超越する痛ましいものでした。バスの運転手様のご厚意で迂回していただいた門脇地区の惨状を直視すると、寝不足の私の眼に自然と涙が溢れてきました。“あの時”よりも前、私が何不自由なく暮らさせていた大坂の町と何ら変わることもない幸せで温かい家庭、学校、職場がそこにもあったに違いない。被災地の方々への行き場のないお気持ちに心を寄せると何とも遣る瀬無い気分が覆われ、大自然の御意志の絶大さと、我々人間の営みの儂さの隔たりの大きさに絶句せざるを得ませんでした。

一刻も早く被災地に足を運び、苦しんでいらっしゃる同胞のために少しでもお役に立ちたいと思ったものなかなか実行に移すことのできなかった私に、ハガキの不思議なご縁によって初めての石巻行きのチャンスを与えていただきました。大谷先生、そして企画・運営のためにご尽力くださった皆様、そして長時間にもかかわらず安全で快適な運行をしていただいたバスの運転手様に心より感謝申し上げます。誠に有り難うござ

いました。

行きのバス車中での自己紹介で、ひたすら謙虚に被災地から学ばせていただきたいというその時の素直な思いを私は話させていたのだと思います。りでいました。しかし、実際に被災地の空気に触れ、そこで日々苦難に立ち向かわれている被災者の方々、また懸命に支援の汗を流されるボランティアの方々に直に接しさせていただくことを通じて、被災地入りする前の私は「自分」に中心があり、高い心の位置であったことを思い知らされ、とても恥ずかしくなっていました。私がこの瞬間に、学びの有り難さを噛みしめながら帰路のバスに乗せていただいているのは、私を気持ちよく送り出してくれた家族、また被災地に学ぶ会に参加された多くの仲間の皆様、そして被災地で私達を待つて下さる方々がいてくださるからなんだと気付かせていただきました。目には見えない深い人間の、そして日本人の絆の存在を感じさせていただきました。大川小学校で私達に向けられた子供たちの魂の光に、これから私は応えていかなければなりません。私に与えられた二度とないのちをどれだけ「他人様」に向けられるか、自分に問いかけながらバスを降りました。未曾有の自然災害から我々日本人が学んだこと、そして私自身が被災地で得た思いを決して風化させないように、今何ができるかを大切に、いのちの火

を燃やし続けたいと思います。

★★大阪府50代 男性★★

「当たり前が当たり前ではない」「当たり前というものは何ひとつない」、まさに今回の被災地に学ぶ会ではそういったことを更に強く感じさせていただきました。

そして、「被災地に学ぶ会」は、単なる学ぶという場であるだけではなく、「自分と向き合う場」「自分を見つめ直す場」「生かされていることを感じる場」でもあるということに改めて気付かせて頂きました。

今回、部員10名と共に参加させて頂く機会を与えていただけた事に感謝すると共に、私にとりましても新たな出会いの場にもなりました。そして、まさに自分自身が試されている気がしております。

「雨」という天候、足場は悪く、水を含んだ物が次から次へと目の前に現れえてくるという「ありがたい」状況でした。取つても取つても、運んでも運んでも先が見えない状況の中、あるのは参加者一人ひとりの思いでした。やっていくうちに、泥だらけになればなるほどその思いが重なり合いい、作業が単なる作業でなくなっていくのを感じておりました。普通なら、厳しい環境、苦しい状

況が目の前に来ると逃げ出したくなる、諦めそうになる場面であっても、それがまったくなく、どこか居心地が良い気持ちになって行きました。それは、年齢、性別、経験のある・ないに関係なく、一人ひとりが自分と向き合いながら懸命に動き続ける行動、気持ちがあつた時に、お互いを思いやる、支えあう姿に変わっていききました。そのひとつが、何気ない「ことば」であつたり、思いやる・協力し合う行為であつたり、譲り合う行動であつたり、そして後半には50メートル以上つながつた「バケツリレー」という形になって現れました。会話も交わしたこともない、今日初めて顔をあわした人間同士の心がつながりを生み出すと何とも言えない気持ちになっていく自分にも出会えました。

そして、一人ひとりが自分のできることを「丁寧に」繰り返すことで、役割は違えども、あらゆるところでしっかりとつながっていくんだと感じました。誰一人として弱音をはく事もなく、黙々と懸命に動くうちに雨が降り続けていることさえ気にならない自分がいました。まさに泥や瓦礫と一体になりました。雨に疲れを流して頂きながらの作業になりました。これが「チーム」の「チーム作り」の原点であると気付かされました。

そんな中、目の前に広がり、埋もれているその瓦礫は、今も自分の生活を取り戻す事ができない

方々、今だに行方不明の方々がこれまで歩んで来られた生活がその深い部分にある、と感じた時に粗末に扱うことなどはできませんでした。それは普段は大阪で当たり前のように生活している自分自身を見つめ直す大切な時間でもありました。一人ひとり、これまでの環境も生き方も、感じ方も違います。しかし、ひとつ同じ目的を持って取り組んでいる中で人の気持ちは変わっていくということを感じました。

私自身、石巻には震災前は一度も足を運んだ事はありませんでしたし、一生来る事はなかったかもしれません。自分がこうして動く機会を頂けたことで多くの方々との出会いもあり、経験もさせて頂けるようになりました。そしてその輪が関西でも広がりとつあり、遠く離れた石巻ともつながってきております。

11月5日、避難所（鹿妻小学校）で本部長をされておりました浅野仁美さんが大阪に娘さんとお二人で来られました。大阪から石巻に帰られた後、「石巻と大阪が自分の中で近いところになりました」ということを言われました。往復26時間かけて来られて、ほんの数時間の大阪滞在の中でもそういう風を感じて頂けたメッセージのひとつに人としての大切な「心の深さ」を感じました。今回も、我々が毎回帰阪前に寄らせて頂いている道の駅までわざわざお越し頂きました。お

話を伺っておりますと、まさに浅野さんの人に対する優しさ、苦勞に立ち向かいながらも前向きに人生を生きておられる姿がそこにありました。普通なら自分の事だけでも大変な中、地域の事や次世代の子供たちの事、石巻の先生方の事などにも目を向けながら活動を進めていくことの大切さを話されておりました。自分のつながりだけでなく、色々な人と人とのつながりを更につなげて行く役割を浅野さんが「架け橋」となって今後も動かれていかれるのだとも感じました。いつも浅野さんを見てみると、「優しさは、強さなり」ということを身を持って我々に教えて頂いているように思います。

また今回も活動をさせて頂いた牡鹿半島は、ボランティアセンターのリーダーの遠藤さんを中心とした3名の若者が震災後から活動を続けておられます。その遠藤さんの思いが、小さな「復興市」という形となって、我々が足を運んだ前日にオープンした約10店舗の店の開業につながったと伺いました。その中のある鯨の工芸品のお店の店主の方は、全てを津波で流された中で、こういった形でも店が再開できた事を本当に嬉しそうに話されておりました。以前大阪の阪急百貨店に商品を紹介するために何度も来られていたと話され、いつか大阪にまた行く日が来るように今はここで精一杯頑張ると話されていきました。

そのイキイキした目、ハキハキとした言葉に「希望の光」を感じました。大震災当初は、何も考えられない状況の中、流されて何もなくなったお店の場所に数日後に絶望感の中戻った時、商品になる前のいくつかの鯨の歯を見つけられたそうです。家さえも流されたような大津波の中、なぜか鯨の歯が残っていたことで希望が湧き、手作りで作り始めて今日の日が来たと話されていきました。「落ち込んでいた場合ではない」という強い思いの中、自分が創った物で人に喜んでもらえる、元気になって頂くという原点に戻った時、自分の心にスイッチを入ったのだと感じました。

そして夕方に牡鹿半島を出発し、5回目にして始めて日が落ちた後の大川小学校に入らせて頂きました。真っ暗の中に2つの光が見えました。私自身は、親・子供の思いと、今も生き続けている人達に対する「未来への光」だと感じました。雨の中、その光が私達を温かく包んで頂いておりました。言葉にはできませんし、言葉にする必要もないと思います。心の中で一人ひとりが自分に問いかける時間があつた場所にあるのではないかと感じます。

今回は、3名の神姫観光の運転手の方々のお陰で深い学びの場になりました。乗務員の3名の方々全員が、自分達も多くのことを学ばせて頂いたと言頂けました。今回、石巻到着後に最初

にバスで入って頂いた門脇地区。私が始めて石巻を訪れた時は、足を踏み入れる状況になく、日和山の上から壊滅した町を眺めることしか出来ませんでした。今回、実際にその町の中に入ると、当時から見たのとは全く違う現状がありました。それまで多くの方々が生活していた場所に何も無くなっている状態、誰もいなくなっている状況、今だに手がついていない場所、離れ離れになった人たちのことを思うと、ただ言葉もなくじっと見ることでできませんでした。本来は、あのような形で足を踏み入れることは出来ない中、我々の会の趣旨を理解して頂き、バスを走らせて頂いた運転手さんの覚悟のある行動に本当に心打つものがありました。

私たちは、決して単なるボランティア活動をさせてもらっているだけでなく、継続し、それを伝え続けていくためにこうやって足を運ばせて頂いているということを決して忘れてはいけなと思います。自分達が経験して学ぶ事が目的ではなく、自分が動く事で一人でも多くの方々の学ぶ機会につなげることで、そして伝え深めることが大切ではないかと思えます。いつも、ご理解いただき、我々の活動にご支援いただいております鍵山秀三郎先生はじめ、日本を美しくする会の皆様、今回ご一緒させて頂きました諸先生方、初めて参加された一般参加の方々、未来ある学生諸君に心

より感謝申し上げます。ありがとうございました。

★★京都府20代 男性★★

第六回被災地に学ぶ会に参加させて頂いた本当にありがとうございました。とにかくたくさんの方に気づかせていただけた3日間となりました。

「何もわかっていなかった・・・。」これが今回の会に参加させて頂いて一番感じたことでした。

まず、行きのバスで大谷先生からのお話の中で、この会が「日本を美しくする会」の義援金で運営されていること。そして、今回参加したいという想いを持った方々がたくさんいる中から私が参加させて頂いていただいているということ。行きしのバスに乗るやいなや何もわからずに参加している自分が情けなくなりました。それは自分の仕事の都合や参加できるチャンスが一度あつたにも関わらず、参加しなかった傲慢な自分、弱い自分がいたことでよりそれを痛感しました。そんな中心境にいる中で、バスでのみなさんの自己紹介と今回に対する想いを聞かせていただいて、「頑張りすぎない。」「無理をしない。」と言うことをおっしゃられ、「えっっ？！どうしたらいいんだ。作業をがんばらなくちゃ何をするんだ。」と思っ

てしまい、正直バニック状態でした。しかし、この意味は活動が終わってから何となくわかった気がしました。要するに現地で作業を頑張ることということでした。私たちからみた瓦礫も現地の方々にとっては大切な想いのつまった遺品であるということ。それを一つ一つ丁寧に運ぶことが大切なんだということを感じたことが一つ、そう思った要因です。

もう一つは、あの活動をさせて頂いた場所での様子を第三者がみたならという視点で考えてみてのことです。活動場所では、大阪、埼玉、東京など全国各地から200人、いや？もつとしたのかもしれませんが。300人近い人達が活動していたので、それだけを見れば「すごい！」と誰しも言うのかもしれませんが。一度もお会いしたことない人が『被災地』というこのキーワードだけで集まり、気づかないうちに協力し、遺品を運ぶバケツリレーのような状況まで創り出したことは本当にすごいことだと感じました。人の想いというのはここまで人を動かすのかということにも気づかされた一方で、先ほども述べたように瓦礫を片付ければそれで終わりではないという事です。

そのことを心底感じたのは、大川小学校を訪れたことでした。ここに行かせてもらわなければ、

上記で述べたように『人の想いはすごい』ということだけが残って、何がしかボランティアをやってきたということだけが残って帰っていたように思います。しかし、大川小学校の慰霊碑の前にあるおそらく子どもさんを亡くされたお母さんの手紙・メッセージをみて本当の復興は『形』だけではない。もつと違うところにあるのだと感じたのです。残された遺族たちは、これから厳しい現実と向き合いながら生きていくことになります。時間が経てば家や道路、信号機なども完全に元に戻ることでしよう。【おそらく10年近くかかると思います。】しかし、表面上だけの復興ではないいけないのではないかとことです。残されたが故に苦しむこともあるだろうし、現実のこととして自殺をされる方もいらっしゃるというお話も聞きました。教師をしている私の立場から考えても、残された生徒が亡くなった子どもたちそのことを受け止めながら、前に進んでいくことは並大抵のことではありません。そして、その子どもたちを指導する教師、側にいて寄り添う保護者の方々にとつても本当に厳しい試練となつてくるのではないのでしょうか？確かに今回の活動で瓦礫などはわずかばかりではありますが、綺麗にすることができました。【今回活動させていた場所のようなどころはたくさんあるでしょうが。】しかしながら、本当に復興していくには

『心』の部分でまだまだだろうし、今からがより必要になってくると思います。そのことにアプローチしていくことが本当にこれから求められていく部分ではないかと感じました。

「現地に行かなくてはわからない。」という諸先輩方からの言葉の意味が少しだけ理解できたと同時に、次に何をしなければならぬのかが見えてきただけに、その次の大変さがわかりました。浅野さんがおっしゃられた「やることはわかっているけど、前に進まない。」ということは、義援金・物資のこともそうですが、私を感じた内面的な一面もあるということのように思えてなりませんでした。

今回初めて参加させていただき、本当にたくさんのご縁を学ばせていただきました。大谷先生・宮崎先生をはじめ、日本を美しくする会の皆様、バスの運転手さん、今回参加された学生さんや多くの参加者の皆様本当にありがとうございました。

★兵庫県40代 男性★

被災地に学ぶ会に参加させていただきありがとうございます。7月に続き今回は2回目の学ぶ会になりました。

行程表には、「ボランティア活動に行くのでは

なく、被災地という場をお借りして、人としての生き方を学ばせて頂く会」と書かれていますように、参加された方々が素直になって「生き方」に向き合えるチャンスがこの学ぶ会は与えてくださっているのだと思います。

私はトライアスロンにおいて、速い、遅い、できる、できない、といった表に出ている数字や結果ばかりを求めていました。

そんな生き方が習慣化すれば、目に見えるものだけを気にして、目に見えない「人の心」に無関係になって「相手」がどう感じるか、気遣いできない行動が増え、人を傷つけていました。

被災地に学ぶ会では、バスの中での自己紹介と感想発表から多くの気づきをいただいております。今回は、私に必要なものを見せていただけました。それは、「気配り」や「思いやり」です。被災地の高校を卒業した大学一年生は、お世話になった監督さんや仲間、地元の方々に心を寄せて話をされていました。

先生方からは、無理せず、頑張り過ぎないように、瓦礫は瓦礫ではなく、瞬間まで生活されていたものと心を寄せることの大切さも気付かせてくださいました。神姫バスの運転手さんたちの気配りには頭が下がりました。休憩の都度「お疲れ様でした。気をつけて行ってらっしゃい」と優しい声かけ、自分の事はさておき、他人のために全

力を尽くされている姿。

牡鹿半島の現場近くになると「丁寧にやりましょう」と大谷先生が言われました。その「丁寧」という言葉の意味は、作業が進むにつれてわかってきました。

がむしやらになつていたらわからなかったことでした。瓦礫を瓦礫と思つていたらわからなかったことでした。人に心を寄せなければわからなかったことでした。皆さんから優しい言葉を聞いていたからこそ気づかせていただけました。

宮崎先生が、泥の中から見つけれられた小さな帽子を優しく丁寧に泥を取り除かれていました。それを目の当たりにして、自分は丁寧と思つてやつていても、そこに心を寄せていなかったのです。宮崎先生は、無言で、姿で、私に大切な事を教えてくださいました。まさに「配慮」でした。ありがとうございます。

日頃から「見えないもの」はみようとしません。だからこそ、日常生活で見えないものが見えるようになる実践をすることが大事だと痛感いたしました。「被災地という場をお借りして、人としての生き方を学ばせていただく」その意味がようやく分かってきたように思います。どうもありがとうございます。

★★兵庫県40代 男性★★

今回、初めて参加させていただきました。多くの方々のご支援により、学びの機会を与えていただいたことに心より感謝申し上げます。

以前、池間哲郎先生の講演会で、「被災地に自分で立つてください。特に学校の先生は一度、早めに現場で行かれた方がよいです。行つてみて初めて感じるものが多くありますよ。」というお話をいただき、心に残っていました。

また、お知り合いの金先生からいただいたメールで、「東日本で未曾有の大震災があり、そこに生きる人は希望を失い、未来も見えない。車でたった10時間行った先では、そんな世界があるのに、それについて触れない、指導しない、アクションをしないということは子どもに『自分の生活につながる』ことは、ほっといていいのだよ』『自分のことだけを考えて生きていけばいいんだよ』』ということを無言で教えているということ。」「と熱いメッセージをいただきました。これも心にひっかかっていました。

ただ、忙しいなどできない理由を掲げて、自分を納得させていました。なかなか行動に移せない自分がいました。具体的な一歩を踏み出したのは震災から八か月がたっていました。

行きのバスでは、参加者の方々からの自己紹介の中で、さまざまな思いの触れ、感じるものが二

つありました。

一つ目は「行きたい」「やりたい」という自分の素直な気持ちを大切に参加しましたという意見です。これを聞いた時、「行かなければ」「やらなければ」と少し力んでいた自分に気づきました。

二つ目は「家族への感謝」です。参加されている方も、いろいろな家庭の事情をかかえながら、参加されているということです。何をするのでも家族の協力なくして、気持ちの良い活動はできないのだと改めて感じました。いろんな学びを得ても、それが自分にとって一番、身近な家族の幸せに結びつかないのなら、それは本物ではないのだと感じました。

牡鹿半島での瓦礫の撤去作業では、はじめのうちは無意識にできるだけよごれない作業を選んでいました。先日、自分が監督をしている野球部の試合で雨天の中でユニフォームをよごさずにきれいに野球をしようとしていた部員を叱りつけることがありましたが、その原因が自分にあることに気づきました。こういう作業は本当の自分に出会います。

ハンドバック・ギター・服・扇子・鍋・ラジカセ・コップなど瓦礫の中には人の生活が感じられるものがたくさんありました。大谷先生が作業を丁寧にしてくださるとお願いされたのも、瓦礫は

実は瓦礫でなく、いろんな人の大切な思いがつま
っているものだからだとあらためて気づきまし
た。

作業後に訪れた大川小学校。多くの児童、教職
員の命がここにあつたかと思うと無念でたまり
ません。祭壇に飾られた生き残った母親のメッセ
ージ。「少しずつ前に進んでいくからね。見守っ
ていてくださいね。」は震災の中で生かされた人
たちが失意の中で前へ歩みを進めようとする力
強さを感じるとともに、一歩をためらっていた自
分を恥じました。

帰りのバスでの参加者による体験発表会も多
くの気づきや学びが共有できて、ありがたい場と
なりました。見方(目線)を変えることで感じ方
が変わるとい話がありました。私も現地に来て、
テレビの画面を通して見る被災地とは大きく違
う感じを受けました。特に町の明かりの少なさに
人のいない寂しさを強く感じました。復興は少
ずつが進んでいますが、まだまだやることはた
くさんあると思います。そして、まだまだ私たち
がやれることもたくさんあると思いました。

冊子の表紙にも書かれている「被災地に学ぶ会」
はボランティア活動に行くのではなく、被災地と
いう場をお借りして、人としての「生き方」を学
ばせて頂く会というメッセージ。この会のお世話
をしていただいている大谷先生から「生き方」と

はたいそうなものではなく、「日常生活」だと思
うというお話が一番、心に残りました。

この会に参加して、これからの日常生活に変化
が起きなければ、学んだことにならないというこ
と。今までより感じてからの一歩を早く、そして
力強くだせる自分をつくっていきます。ありがと
うございました。

★★兵庫県40代 男性★★

今回、はじめて「被災地に学ぶ会」に参加させ
ていただきました。

きっかけは、同じ学年の先生が9月にこの会に
参加されたことです。帰ってこられてから、いろ
いろお話を聞いたり、体験記を読ませていただき
中で、「自分は何もしていない。恥ずかしい」「自
分もぜひ参加したい」という思いが強くなりました。
た。

当日、その先生といっしょに尼崎駅へ行きまし
た。バスに乗り込み、出発。さっそく、大谷先生
のお話と、自己紹介が始まりました。参加されて
いるみなさんの志が高く、どの方の自己紹介もす
ごく心を打つ内容でした。私は、「自分は弱い人
間。でも、その弱さに向き合い、進んでいくため
にも、いろいろ学びたい」とお話しさせていた
きました。

翌日、まず朝に石巻市周辺をバスで案内してい
ただきました。はじめて自分の目で見る被災地の
状況はすさまじく、本当に言葉が出ませんでした。
「これが、もし自分の住んでいる町だったら・・・」
そう思うと、体が震えました。

次に、牡鹿ボランティアセンターへ移動しまし
た。当日の作業は、瓦礫撤去です。大谷先生から、
「瓦礫といっても、元は誰かの持ち物。とにかく、
ていねいに作業しましょう」とお話がありました。

撤去場所は、もともと田んぼだったところであ
た。震災から8ヶ月、まだほとんど手つかずの場
所でした。小雨降る中、撤去作業をスタートしま
した。最初に、赤いギターを掘り出しました。私
も、趣味でギターを弾きます。「このギターの持
ち主は、どんな人だったのだろうか」「無事だっ
たのだろうか。それとも・・・」ギターを持った
まま、しばらく動けませんでした。他にも、さま
ざまなものが埋まっていました。足場が非常に悪
く、長靴を履いた足が、何度も取られそうにな
りました。重いものを運ぶときは、とても大変でし
た。でも、重いものを持っていると、たくさん
の方が助けてくださいました。他の地域から来ら
れていた方も、どんどん手を貸してくださいまし
た。同じ志が集まった者同士、心が通じ合う思い
でした。

途中で、地元の方がお話をされました。「自分

の妻が、津波で流され、いまだに見つかっていない。この田んぼに埋まっているかもしれない。持ち物でも見つければ・・・」とたんに、その田んぼの風景が一変しました。「ここは、たくさんの命が奪われた場所なのだ・・・」あらためて震災の恐ろしさと、大切な方をなくされた方の、想像を絶する悲しみを思いました。

午後の作業では、バケツリレー形式で行いました。を「これ、重たいですよ」「くぎがでています。気をつけて！」など、相手を気遣う言葉が自然と出ていました。渡してくださる方も、お渡しする方も、見ず知らずの人です。でも、心はひとつでした。参加者の中に、若い先生や大学生のみなさんがたくさんおられました。特に、大学生のみなさんの活躍は、すばらしいものでした。重いものを、文句一つ言わず、率先して運ぼうとされています。その姿に、多くのことを学びました。

午後2時過ぎ、作業終了。でも、約200人で、1日ばかりで作業をしても、その場所のすべての瓦礫を掘り出し、運び出すことはできませんでした。そして、このような場所が、まだまだ、途方もないぐらい多く残っています。まだまだ始まったばかりなのだと言うことを強く思い知らされました。バスにもどると、運転手さんたちが、手洗い用の水を用意してくださっていました。運転手のみなさんは、今回、本当にたくさんの温かい

心遣いをしてくださいました。心打たれることばかりでした。

バスに乗り、次に大川小学校へ向かいました。真つ暗な中、そして小雨降る中、バスを降りました。祭壇が設けられていました。そこに、亡くなったわが子への手紙が置かれていました。それを読んで、胸が張り裂けそうな思いがしました。そして、自分の子どもが頭を浮かびました。私には、4歳になる一人息子がいます。この子が、突然いなくなったら・・・。また、クラスの子どもたちが、みんな突然いなくなってしまうら・・・。この時、あらためて気がつきました。

「死亡者1万数千人、行方不明者数千人」でも、それは一つひとつの、かけがえのない大切な命の積み重ねだということに。その一人ひとりに、それぞれ大切な家族、仲間や友だち、親戚がいたはずです。そのような大切な、本当に大切な命が奪われたことの重さに、今更ながら気がつきました。自分は、何と鈍感だったのだろう。どうして、こんなに大切なことに気がつかなかったのだろう。「命は大切にしましょう」そんなことは、これまで子どもたちに、何度も何度も語ってきました。でも、今日ほど、命の大切さ、尊さを痛いほど感じたことはありませんでした。と同時に、「生きている」ということが、どれだけ大きな「奇跡」なのかということにも気がつきました。実は、私

の息子はしょうがいを持っていません。自閉症です。4歳になる今も、言葉を話すことができません。でも、この「生きている」という「奇跡」の前では、しょうがいのあるなしなど、ささいなことのように思えました。しょうがいがあってもなくても、勉強が得意であっても苦手であっても、大切な命を生きているのだから、みんな力で力を合わせて、幸せに生きていけばいいのではないか、という思いが強くなりました。そして、そんな思いを、帰りのバスで報告させていただきました。どの方の報告も、熱い思いにあふれ、大きな学びとなりました。

今回、参加させていただき、信じられないぐらい多くの学びをいただきました。そして、それは日本を美しくする会のみなさんを始め、大谷先生、運転手さん、当日来られなかった方々、この会を紹介してくれた同僚の先生、いっしょに活動させていただいた同志のみなさんなど、多くの方に支えられての学びであることを、忘れてはいけません。と思います。また必ず参加したいと思っています。そして、今回学んだことを、自分の周りに広げていけるよう、努力していきたいです。本当にありがとうございます。

★和歌山県30代 女性★

「喉が痛い・・・寒気もするし風邪やわ・・・、もう今日の作業無理かも」

実は朝、石巻に到着し、門脇地区の甚大な被災状況をボーッと眺めながら思っていました。心配してくれている友人には「大丈夫、大丈夫」と強気でしたものの、内心ではどうしよう・・・、と考えている私がいきました。頭では、今回来られなかった方々のお気持ちや、バスを出してくださっている「日本を美しくする会」のことを考えると本当に申し訳なく思う反面、体が逃げていました。

本日の現地へ到着。とにかく今日は、無理せず自分に出来るようなことをしていこう・・・、と先月の鮫の浦地区での作業を思いだし、まず、ぬかるんだ場所に道をつくることから始めました。

そのあとカマを手には8ヶ月間野さらしであった田んぼに生えすぎている草を少しずつ刈りました。近くで作業されていた行政の関係者でもある川中さんから健康者ではない被災者のことなどのお話をお伺いしました。避難所にも入れずに車での生活を強いられておられる方々、支援学校に通いたくても通えない現実。報道で見えてこない現実を知ることができました。

そして、いろいろな思いを巡らしつつ、ひたすら草を刈りました。結構な運動量。汗をかいたのか少し体が楽になってきました。

休憩に入る前から、一人のおじいさんが傘をさしてこちらをずっと眺めていました。又ノカワさんという地元の方でした。私たちにお話をしてくださいました。津波で奥様が行方不明になり8ヶ月たった今でもその手がかりを求めてこの辺りを訪ねてきているそうです。お話されている目は潤んで、お顔も紅潮されておりました。今は一人になってしまった・・・とおっしゃっていました。

長年連れ添った奥様を強く思う気持ちと、毎日の風景を一人、どんな気持ちで見ているのだろうと思うと本当に涙が出てきました。携帯の待ち受け画面には笑顔の奥様の写真がありました。この頃になるともう自分の体調云々は意識からはずれていました。それよりも少しでも又ノカワさんの奥様の手がかりになるものを探し出そうという思いで一杯になっていました。

そうなればあとは、ひたすら、ただひたすら動くのみ！行動あるのみ！肌で感じる気持ち、ここに居る素晴らしいメンバーを信じるのみ！

お昼を過ぎて、今回も「我歴リレー」がはじまりました。まさかこんなもの流せないであろうという大物もリレーの力で最終地点まで到達しました。

井上先生の不屈の「あきらめない発掘精神」に後押しされ周りにいた女性も火事場の馬鹿力を感じる存分発揮しました。大きなタイルの壁、重た

い海苔の乾燥機、泥に埋もれたガレージのシャッター、モーターらしきもの・・・。一人だったら絶対に発掘不可能です。

しかし、女性の力だけではさすがに限界がありました。あとは、シャベルで掻き出してください八尾先生、川中さん、大学生の力でカバーして頂きました。

現場は、昼からの雨でぬかるみも激しくなり、自分たち自身の足も泥に埋もれて抜けなくなってしまう場面も多々ありました。我歴だけでなく「メンバー」も仲間の手により発掘されていました。「このまま私も（リレーで）流してもらおかな」などと妙なテンションになり大笑いしました。アツと言う間の作業も終わり、牡鹿ボランティアセンターに戻り「のれん街」を訪ねました。この「のれん街」はきつと数年後、お店の数も増えてとても立派な商店街へと変化していくこととします。そんな第一歩となる記念すべき日に訪れることが出来て嬉しく思いました。

酒屋で「泡盛」を買いました。この泡盛は津波で流されてきた「復活泡盛」でラベルもほとんど剥がれています。家へ帰って夜、飲もうとしたところ、栓が開きません。

なんとかこじ開けたところガラスの部分と栓の部分で普通では入らないであろうと思われる場所に砂が混じっていました。そして、味もなん

となく海水の入ったしょっぱい味のする泡盛でした。3・11、この泡盛はいろいろな場所を漂い、ものにぶつかり、すごい勢いの渦にもまれて：：、現在私の前に存在してくれています。そして本来の仕事である「人に」飲んでもらうという使命を果たしました。そう思うと感慨深く、値段の付けられない、本当に価値のある一杯でした。帰りに「we remember 3.11 絆」というステッカーを記念に購入しました。3・11を忘れないように、自分の中でも決して風化していかないように、体験を日常生活に生かせられるように、そして出会ってくださった被災地に学ぶ会の素晴らしいメンバーのことを生涯忘れないようにという思いを、このステッカーをいつでも目につく所に張っておこうと思います。

そして、最後になりますが、不思議と喉の痛みや風邪もかなり回復して帰ってきました！実は、バスの運転手さんに風邪薬を頂いており、それが効果を発揮したのかもしれないし、もしかすると、やはり運転手3名様は、友人の中村さんが銘々した「恵比須さんや布袋さん」という福の神であったのかもしれない。細かいお心遣いや温かいムードを作ってください本当にありがとうございます。

また来年も引き続き参加させて頂きたいと願っております。そして体調管理はこれからの寒い

季節にとつて、出発前の本当に大切な仕事となるのだと今回身を以て学ばせて頂きました。有り難うございました。

★★大阪府30代 男性★★

今回は自身二度目の「被災地に学ぶ会」の参加でした。一度目は九月。一日目には牡鹿ボランテアセンター近くのガソリンスタンド復旧作業に関わり、二日目は避難所の掃除に関わらせていただきました。とにかく自分にできることを精一杯させていたかどうかという一身でやっていたので、一度に限らず続けて行かせていただかないと、と思っていました。今回参加するにあたり、準備や企画のためにたくさん時間をかけてくださった方々、また、私たちのために席を譲ってくださいくださった方々、快く送り出してくださいくださった職方や家族の皆様から感謝いたします。本当にありがとうございます。

自己紹介の中では、何度も来られている方もいれば初めて参加される方もいました。二度目であり、たくさんのお仲間と顔見知りである自分にとっては、「ここでたくさんの方々に声をかけ、さらに絆を深めていこう」と思っていました。

現地に着き、まずは前回作業させて頂いたガソリンスタンドの様子を見に行きました。すると、

その店長さんがお仕事を精力的にされ、お客様と談笑している様子を目にしました。それだけでなんだかうれしくなり、心にエネルギーが満ちてきました。

その後、作業場である海岸沿いの田畑へ。「ボランテアが入るのは初めて」という場所でした。事実、大きな船や車から、養殖に使っていたカキの貝殻、様々な思い出の物まで、たくさん物が田畑の泥の中に埋まっていました。さらに、それを隠すかのように生い茂る葦・・・8か月たった今でも手付かずな場所でした。ここだけでも果てしないのに、こんな場所があとどれだけあるのだろうか・・・それを思うだけでも、気の遠くなるようでした。しかし、ここに来させていただいたことを考え、まず自ら奥の方まで向かっていきま

ずつと繰り返しました。一度目の休憩時、現地の方からお話をうかがいました。奥様が津波に流され、いまだに行方不明であること。そして、もしかしたらこの田んぼに本人や本人の持ち物が埋まっているのではないかと思っていること。これは他人事ではなく、当時から今までもずっと苦しんでいる方が目の前にいる。その後も場所を変え、葦を刈っては物を探しました。その場にいる人々全てがとにかく精力的に動いていました。そんな方々に積極的に声

をかけました。そうすると、不思議と自分も元気になれました。

食事後、今度は物を運ぶリレーに混ざり、大阪からの方々だけでなく、埼玉や東京など、いろいろな場所から集まった方々と協力して物を分別しました。特に女性の方々は大変だったのではないかと思います。でも、そのかいあってか、私たちが引き上げる頃にはずいぶんと片付けが進んでいました。私たちの後に別の団体様が活動してくれていました。こうやって、たくさんの方の思いを集めれば必ずできるはず。だからこそ、自分もまた続けて来ようと決心しました。

活動後、バスの運転手さんの優しさに触れながら、牡鹿ボランティアセンターの前に開店した商店街へ向かいました。昼ごはんを用意してください。パン屋さんを始め、ラーメン屋さんでの食事も心が温かくなりました。現地の方々に「ありがとう」と伝えられる喜びも感じる事ができました。

その後、大川小学校へ行きました。今回改めて、子どもが目の前にいてくれることだけでどんなに幸せなことか・・・そんな「愛」の感情を感じました。私はつい子どもたちに対し、「保護者の目を気にして」とか「まわりの同僚の評価を気にして」という面で指導をしている弱い部分が多くあります。そんなことだから、あらゆること

を細かく指導しても子ども心には届かず、うわべだけの状況を作り上げてしまっているような気がします。もっと全てを受け入れ、「愛」をもって子どもたちに接していけるよう、求めず自ら動くようにしていこうと思いました。

帰りは今回ともに活動した皆様のお話をうかがいながら、改めてこの場にいることの幸せと、この場にいることができるように計らってくださった皆様に感謝しました。今後も、自分のできることをとにかく動いていきたいと思えます。ありがとうございました。

★★兵庫県40代 男性★★

第六回被災地に学ぶ会に参加させていただきました。ありがとうございます。第一回から案内をいただき、活動を知ってはいいましたが、日程が合わず、ようやく今回参加できることとなりました。

今回活動させていただいたのは、まだ手の入っていない水田でした。元々は海の見える美しい水田だったのでしようが、津波が様々なものを流し込んでいました。漁具や家庭用品から車や船まで、本来そこにあるはずもない物がありました。そして草が背高く生い茂っているのは、人の手が入っていない証でした。草を刈り取り、出てきたものを分別しながら作業を続けました。ぬかるんだ足

場と雨に作業は思うように進みません。途中、近くに家があったという男性が見えられました。奥様が未だに行方不明で、その手がかりを求めているということ。そして家にあつたものは何一つ残っていないので、探したいということでした。その人の物ではなかったのですが、結婚披露宴のビデオテープがあったり、お茶碗やおもちゃなど、家庭にあるべきものが泥にまみれて出てきました。その一つ一つに持ち主がいて…と考えると辛くなりました。誰もがそんな気持ちになったのでしょうか。運ぶ時や分別するときにほうり投げたりする人はいませんでした。午後からは自然とバケツリレーの要領で運び出しました。全く知らない人の集まりですが、「重たいです。」「釘が出ています。」「お願いします。」「ありがとうございます。」「などの声かけがありました。重たいものは大学生、高校生が大活躍しました。とても頼もしかったです。

夕方遅く、もうすっかり暗くなった時に大川小学校へ慰霊にいきました。校舎の前に慰霊碑が建てられ、お花や手紙が添えられていました。語る言葉がありませんでした。ただただご冥福を祈りました。

この会は「被災地という場をお借りして、人としての生き方を学ぶ会」です。今回、私は何を学ばせていただいたのか。これを今の段階で言葉と

してまとめることは難しいことです。言葉にできない思いが今、私の中にあるのだと思います。その思いとは、例えば、バスの中で自分の心を開いた、強く、心優しい方々の表情であったり、重たい物を共に運ぶ時の仲間から私に対するいたわりの声であったり、リレーをしている時に出会った耳のご不自由な方の「釘が出ています」ということを伝える手と表情であったり、奥様が未だ行方不明となっている方の声であったり、大川小学校での父母の手紙であったりするのです。こういった思いを言葉に置きかえるのではなく、思いとして大切にしたいと願っているのです。

企画から手配一切をしていただいた大谷先生、宮崎先生、安全に送り届けていただいたバスの運転手の方々、バスの中で思いを語り、学びを共有した人々、作業中に声をかけていただき、一緒になつて撤去作業をしていただいた方々、泥を流すのに水を貸していただいた地域の方、そしてこの活動に快く送り出してくれた妻に感謝しています。私はこんなにも沢山の人に支えられて素晴らしい体験をすることができました。

私は教師です。どんな形で伝えることができるのかはわかりませんが、大切な未来を担う子どもたちに伝えていきたいと願っています。本当にありがとうございます。

★★兵庫県40代 女性★★

牡鹿から帰った翌朝、いつもと違ったのは、筋肉痛の体で起き上がるのに少し時間がかかったことくらい。いつもと変わらず暖かな布団、顔を洗う時出てくる水、朝の食事、家、仕事、家族など、当たり前の日常が当たり前前に始まることに、いつもと違って感謝できた。

金曜日の夜、尼崎駅から出発したバスで、約12時間後、高速道路を下りて石巻市内に入ると、いつもならあるべき家や車や命が全て流され、何もかもが変わり果ててしまった町が広がっていた。そして集められ高く積み上げられた瓦礫や車の山。でもその瓦礫は思い出の詰まった大切なもの。胸が痛んだ。地震から8カ月もたっているのに、なぜ再建される家や学校や人の姿がないのだろうか。と考えると、千年に1度と言われている大津波だが、危険区域だと分かった以上、安全な場所での新たな町づくりをしなければいけない。そのため、今は離れた仮設住宅で暮らし、市や国などの行政により、お金や物や人が動きださなければ、何も始まらないことが分かった。帰ってから見ると、自力で再建した家が、今後公園として市に土地を買い取られるという。行政の対応の遅さなどが、未だに被災者を苦しめていることが町をみただけでも分かる。阪神淡路大震災では、被災した地区に再び家や学校が、耐震工

事などをして復興できたが、津波で被災した町は、そう流れるようにはいかないようだった。

バスは、小さな漁村が点在する牡鹿地区に入った。町と違い、住んでいる世帯数も少なく、優先順位が後回しになっているのか、壊れたままの家や流されてきた船などがそのままになっている。まだ手つかずの状態。バスから見える海は、向こうから何mもの津波がやってきた恐ろしいものが住む海に見えた。でも、今の穏やかな海に浮かぶ何隻もの船も見えた。きっと海の漁師たちが、自然の恵みももらいに、再び海に出たのだろう、希望の船が浮かぶ海に見えてきた。

そんな小さな漁村の水田で、瓦礫の撤去と背の高さ以上ある芦を刈ることになった。運動場ぐらいの広さで、まだ地震後人が片付けに入っていない場所。埼玉や東京からなど他にも集まっていた団体の人達約100人で作業が始まった。小雨が降る中、ぬかるんだ水田に足を踏み入ると、長靴がうまって前に進めなかったり、広すぎる水田で刈る作業が途方もなく感じたりしたが、ここを綺麗にしたい、もとの姿に戻したい、近くに住む方の奥さんがまだ行方不明だということで、何か手掛かりを見つけない、色々自分の中で目標を持ち作業にはげんだ。最初に拾ったものは帽子、持ち主がいて何か思い出のあるものに違いなく、その後もたくさんの「品」をひろい、集積場に届けた。

時間が経ち、手も痛い、腰も痛い、泥だらけにもなった。でも、そのうち、何も考えず無心でやっている自分に気付いた。いつもは、何かを考えながら生きていく気がする。くしなきやいけないとか、くができてない、ではなくて、「行きたい」と思ってやってきたこの場で、「無心」になって作業する自分を発見した。

初めて一緒に作業する人たちも、時間と共に一つのチームのようになっていき、作業後半は、一つ一つ真っ黒で泥だらけの「品」を皆で渡しあいながら運ぶリレーが始まった。流れついたカキ養殖の道具、網、扇子、写真、ビデオ、靴、花瓶、お茶碗、木：「クギが出てるので危ないですよ！」

「次重たいです！」など、渡されてくるものに対して声かけも始まったり、女性だからと重たいものは飛ばしてくれたりする親切な人も。その中で感心したのは、大学の野球部や学生など若い人達。最初はリレーの一員だったが、ぬかるみの中運ぶのに大変な、塀のブロックや、泥をたっぷり含んで重すぎるたたみなど、「重たいものはオレらが運ぼう！」と、率先して動いたり声を掛け合ったりしている姿。選手としてだけでなく、人として、すぐ立派でかっこいい人たちだったから、これからも応援したいな〜と思った。夕方には、水田全部は片付かなかったけれど、人の手では運べない車や船が刈られた芦の中から姿を現わしたり、

かなり見晴らしもよくなったし、いろいろと手掛かりになりそうな「品」もたくさん集められ、まだ作業されていた方に残りを託して引き上げた。

この活動で、「無心」になる自分を見つけたたり、「品」を丁寧に扱うよう心がけたり、チームとして「助け合う」ことができたし、現地やバスで色んな人と「出会い」、無事送り届けてくれたバスの運転手さんたちに「感謝」したり、色んな事を学んだり自分と向き合う事ができた。でも、一番は「命」。いつもあるべきものを津波で失われた町に立ち、あらためて生かされている「命」を大切に、毎日を過ごしていきたいと感じた。

そして大谷先生、先生の発せられる言葉一つ一つに、ものすごく重みを感じました。全て経験が言葉となり私たちにさまざまな影響を与えて下さり、とても心に残っています。色々なことをつなぎ合わせて下さり、心から感謝しています。ありがとうございました。

★★奈良県40代 女性★★

「被災地に学ぶ会」へ参加させていただくのは、今回で4回目となります。

この体験記を書かせていただくのも4回目。この体験記を書く時間も、私にとつてとても大切な時間です。今回の振り返りだけでなく、3回目か

ら4回目の間に私はどのように変わったのか、今の自分の課題は何か、今回学ばせていただいたことで、自分がどのように変わっていかなければならないのかなどをじっくり考えることができる時間だからです。

今回は、いつも一緒に行かせていただいている水野先生と、前回初めて一緒に行くことができた学び仲間の大原先生が、学校行事のため参加できませんでした。また、尊敬している大木先生とも、出発地の尼崎で言葉と握手を交わしただけでした。力ない私には三人の思いを「背負う」ことはできません。どちらかと言うと三人の思いに「押し」させていただいて「参加したように思います。」

水野先生からは、いつも刺激をいただき、私の心の支えにもなってもらっている、今回一緒に行けなかったことは、とても寂しく残念でした。改めて仲間の存在の大きさを感ずることができました。

参加させていただく回数を重ねるたびに、責任が重くなっていく気がしていました。ただ「参加しているだけ」にならないように、前回までと違う気づきがあるように：と気負っていました。

でも、行きのバスの中で、山路先生から「今回は力を抜いて感じるままに参加します。」というようなお話を伺い、私の肩の力も抜けました。山路先生からは、いつも「心の置き方」を教えてください

着いたとき、辺りは真っ暗でした。祭壇につけていただいた照明とバスのライトで、私たちはお参りさせていただくことができました。

祭壇に飾られたお手紙に、また涙が止まりませんでした。「目が覚めたら、あなたが横で寝ている気がする。」…いかほどの悲しみか…。このお手紙は、亡くなった娘さんのためであり、書かれたお母さんのためでもあり、そして、震災を忘れてはいけない私たちのためでもあるように思います。

祭壇から目を上げると、バスのライトに照らされた私たちの影が校舎に伸びていました。それを見て、私はドキツとしました。まるで子どもたちが遊んでいるかのようなのです。胸が苦しくなりました。気づけば、私は自分のクラスの子の名前を、一人ひとり心の中で呼んでいました。

ここに来させていただくと、クラスの子どもたちへの愛情を確認することができます。そして、教師としての責任の重さを感じることができません。それらのことが絶対私にプラスになっ

ています。今回も、浅野さんが道の駅に来てくださったっていました。浅野さんのピカピカの笑顔が私を元気にしてくださいました。浅野さんのように、エネルギーを発する人になりたい…浅野さんにお会いするたびに、そう思います。

帰りのバスの中で、チームの皆さんのお話を伺い、またさらに深い学びをいただきました。その時、私がさせていただいた話は「心の栄養」についてです。

私は40歳で教師になり、講師を4年間勤め、昨年、最初で最後の教員採用試験に合格し、今年度は初任者教諭として新たな教員生活をスタートしました。

教師になる前は、文化会館でコンサートや演劇を企画運営する仕事をしていました。その時から、「食べ物は体の栄養、勉強は頭の栄養（「教養」という手話が、頭に栄養を与えるような手話なのです。）、芸術は心の栄養。」と考え、現代人に不足していると考えられる「心の栄養」の大切さを力説していました。特に、子どもたちに「心の栄養」が必要だと考え、その当時からアーティストを学校に連れて行く活動をしていました。おいしい物を食べると、その食べ物を大切な人に教えたくなると思います。

同じように、素晴らしい公演等に出会うと、大切な人その公演を観てもらいたいと私は思います。大切な人にも「心の栄養」をとってもらいたいと思うのです。それが公演等を企画する私の原動力になっていました。

「被災地に学ぶ会」は、私にとって「心の栄養」だということに気づきました。弱い私の心に栄養

を与えていただいているように思います。

今回、私のとても大切な元同僚と一緒に参加することができました。その人にも被災地で学ぶ体験をしてほしいという願いが叶いました。車窓から飛び込んでくる心痛む光景、黙々と続ける作業、人との出会い…彼のことですので、しっかりと咀嚼し、「心の栄養」となったことと思います。そのことが、今何よりも嬉しいです。

さあ、次は、私の体験を、クラスの子どもたちの「心の栄養」とするため、どう料理していくか…。最大の課題です。

「第一回 被災地に学ぶ会」に参加することを決めるとき、息子が言った言葉が私の背中を押してくれました。「オカンは伝えるべき立場の人間だから行った方がいい。」

私は、まだまだ伝えられていません。何か伝えられるだけ、まだ学べていないのだと思います。だから、また参加させてください。

最後になりましたが、今回も被災地に行かせていただくにあたり、「日本を美しくする会」様に多大なるご支援をいただき、大谷先生をはじめ皆様にご準備等の労をとっていただき、運転手の皆様には温かいご配慮を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。

また、今回ご一緒させていただいた皆様、ありがとうございました。

学ばせていただくことを充分に表現できず、もどかしい思いでいっぱいですが、以上を私の体験記とさせていただきます。

★★京都府40代 男性★★

9月に参加させてもらって、自分に何が出来るか考えました。私がこうして参加できるのは、これを企画して下さり、運営して下さい、連絡調整、資金援助、バスの運転……等々、数多くの方々が動いて下さっているおかげで、来させていただいている！ということ強く感じました。

そして、それは見えているほんの一部で、本当は見えていないところで、もつともつと多くの方々に支えられている…… そう想像します。

それが、分かった上で自分はどうするのか？

私は、高校で教員をしています。この会に参加した動機の一つが、「生徒たちに被災地で学んだことを伝える」ということでした。それなら、なるべく多くの生徒に、「生」の話を！ その努力をする。それがまずすべき事だと感じました。帰校してすぐ学年の先生にお願ひし、何とか話をさせて欲しいと依頼すると、多くの先生から快諾。「この方がいいのでは」というアドバイスや、機器の準備、集合指揮、感想文用紙の印刷、準備も手伝ってもらい、学年全体の生徒に話す機会を

一週間後に作ってもらいました。

生徒たちは真剣な表情で、時には涙を浮かべて話を聞いてくれました。大川小学校の場面がやはり心に強く残ったようで、「言葉にならないです。」と感想に書く生徒が多くいました。

テレビなどでもめっきり報道される回数が減り、9月の時点でも、「もう随分復興したのかかと思っていました」「正直なところ、忘れかけていました」という、書き出しの感想が多く見られました。

車で10時間程しか離れていない場所で、今現在も、苦しんで、困っておられる方がいるのに、そのことにまったく触れずに日常過ごしている事への違和感。それは、前回金先生がバスの中でおっしゃっていた、「ヒドウンカリキュラム」という事になるのではないかと思います。

つまり、「困っている人が居ても、自分に直接関わりがなければ、放っておいてもいいんだよ……」と暗に教えていることになってしまおうということです。

こうやって身近な大人である私が、微力ではありながらも被災地で活動させていただき、その一端を、目の前の生徒たちにダイレクトに伝えることで、そのことを少しでも伝えられたらと思います。そんな思いで今回も参加させていただきました。

今回強く感じたのは、「瓦礫は瓦礫じゃない」ということです。

今回の作業場は鮎川から3kmほどの小さな港。震災後初めて瓦礫撤去作業に入る場所でした。まだこんな場所があるのかと最初は呆然としました。田んぼだった場所に、車や船、がれきが散乱し、葦が1・5mほどの高さに残っていました。泥の中から、木片や土砂に交じって食器や布団、衣類などが出てきます。8か月間、汚泥に埋もれていたそれはもちろん使い物にはなりません。重機が入れる状態にするため、まず人の手で一つ一つその瓦礫を、燃えるごみ・燃えないゴミ・木材・牡蠣の養殖貝殻・金属・缶・ビンに分別。激しい異臭。

そんな雨の中、70歳ほどの男性がじーっと作業を見ておられました。お話を伺うと、奥さんがここで津波に呑まれたこと。まだ行方不明なこと。この辺りで発見されるかも……「何か一つでもゆかりの品が見つかれば」……そう言われました。

この方にとっては、泥だらけのこの一つ一つが、大切な思い出の品。瓦礫は瓦礫じゃない。泥の中から掘り出す手つきが、大切なものを扱う手になりました。気づかせていただきました。

また、今回一緒に行ったメンバーに福島県聖光学園と宮城県仙台育英高校出身の学生がいました。二人とも実家は関西で、卒業式を終え関西に

帰ってきた直後の、3・11、震災。「向こうに
いなくて、よかった」最初そう思ってしまった自
分が悔しかった。友達やお世話になった人がたく
さん現地にいる……。その複雑な思いを「行きの
バス」で話してくれました。

そして、帰りのバス。「今、何不自由なく過ご
せている有難さを本当に感謝します。」「また、
来て、自分のできることをしたい！」涙を浮かべ、
前向きな気持ちを語ってくれました。今回大学生
が15名参加。若い力の純粹さ、凄さを再認識し
ました。

一番大切なボランティアは、「何かをしてあげ
る」ことではなく、「今を精いっぱい生きること」
そう改めて気づかせてもらいました。本当に、あ
りがとうございました。

★★大阪府40代 男性★★

今回、初めて参加させていただきました。参加
させていただいたことに心から感謝しています。
バスの中での大谷先生や宮崎先生はじめ、みな
さんの思いをそれぞれの言葉でたくさん聞かせ
ていただきました。一言一言に重みがあったり、
やさしさがあったり、共感したり、温かみがあっ
たり、もうあの心のメッセージを聞かせていただ
けただけでも参加できてよかった、本当にありが

とうございました、という気持ちになりました。
また、バスの運転手さんたちの心意気や配慮にも
本当にただただ敬服するばかりです。本当にみな
さんがすばらしく、最高の方たちでした。ご縁が
あって短い時間ではありましたが行動を共にさ
せていただいたことは、これからの自分の宝物に
なります。

現地は、まだまだ時間が止まったままのところ
も多く、今回活動させていただいたところも、今
まで手付かずの状態ということでした。活動をは
じめる前に大谷先生から「丁寧に」ということを
お聞きし、また、奥様が未だ見つかっておられな
いという現地の方のお話を聞かせていただいた
上での作業でしたので、とにかく、埼玉の方も含
めてみなさんと力を合わせて、謙虚な気持ちを持
って作業させていただくことを大切にしました。
よく「共同」作業という言葉が使われますが、私
の職場では「協働」という言葉を使います。造語
なんですけど。みんなと協力し合い、自らも率先
して動くということなんですけど、今回、まさしく
その言葉の実践ができた、体感できたように思い
ました。はじめて会った方とでも、年齢や職種が
それぞれ違っても、心を一つにし、その作業に思
いを寄せて、一つの目標に自ら向かうことができ
気持ちのいい疲れと不思議な表現になるかもし
れませんが、うれしい気持ちになりました。

これも現地に行かなければ実感できないと思
うのですが、作業が終わり、浜のれん街でご夫婦
二人でされているお店でうどんをいただきますし
た。おいしいうどんをいただきながら（本当にお
いしかったです）思い出させてしまうようで申し
訳ないと思いますが、震災当時の様子や昨日開
店するまでのことなどを聞かせていただきました
た。地震直後の避難された時の話や今までのこと
をご夫婦で笑顔でお話してくださいました。しか
し、その笑顔の裏側には、怖かっただろうし、今
までも言葉にならないくらい苦労されていると
思います。また、これからどうなるんだろうとい
う不安もあると思うんですね。笑顔でこれからが
んばるといふ気持ちと背中合わせにそういった
気持ちもあるということを忘れてはいけな
いと感じました。また、私たちは、現地で一生懸命
に作業をさせていただくわけですが、それはほん
の短い時間です。しかし、現地の方たちは、これ
からもずっと震災に向き合い、現実に向き合っ
ていかなければなりません。「継続は力なり」とい
う言葉がありますが、私たちも震災を風化させる
ことなく、心をよせて、被災地に学ぶ会を継続さ
せていかなければと感じました。

最後に行政の人間として、門脇地区や牡鹿、そ
して最後に大川小学校に寄せていただき、本当に
目の前の現場で多くの人命が失われ、危機管理の

問題やその後の対応について、考えさせられました。特に、大川小学校の夜間のライトのことで大谷先生がおっしゃっていましたが、ライトの設置、それと向きの問題については、本当に行政の人間としての気づきや視点、どこに向けて仕事をしているのかということを改めて見つめなおす機会となりました。

今回の参加での学びは、人と人とのつながり、絆というものがいかに大切であるか、これからどう繋ぎ続けていくかということと、自分はどこに向いて、誰の、どういった気持ちに寄り添って仕事をしていかなければいけないのかということについて考える機会をいただきました。本当にありがとうございます。この宿題の答えは、今後も継続して参加させていただきながら、見つけていきたいと思えます。これからもよろしくお願ひします。

★★兵庫県20代 女性★★

今回もこの会に参加させて頂いた事に本当に感謝しています。

バスの運転手さんのお計らいでバスから見る事が出来た、門脇小学校のある地区の景色は私にとつてとてもショックでした。黒焦げの校舎、山濟みの車などそこにいた人の生活がむちゃくちゃ

やになってしまった光景は3月11日で時間が止まっているようでした。今までに震災後から手付かずの場所も見せて頂いた事もあったのですが、何回か被災地に行くことにちよつとずつ整備されていたり、ボランティアが片付けに入ったりしていた場所を見て「復興しつつある」と漠然と思っていました。でも私が今まで見ていた景色はほんの一部だった事、まだまだ手付かずの場所が多くなる事に改めて気付かされました。

今回の作業は、何をすれば良いか分からないというのが正直な最初の感想でした。最初、葦を刈り取っている時この作業が果てしなく思っていました。その時「全部やろうと思わなくて良いよ」と言ってくださったり、私が疲れてそうなのを見て遠くの方からでも「大丈夫？」と声をかけてくださった方もいました。バケツリレーしたいなど思っていると「バケツリレーしましょう」とみなさんに声をかけて下さった方もいました。

「この場所どうやってやっていこう」と相談しながら一緒に作業してくださった方もいました。そういう暖かい声かけをたくさん頂いてさらに頑張る事が出来ました。最初は途方もなく思えた作業でもやっているうちに目標が見えてきて最終的には皆さんと力を合わせて出来たと思える！力を合わせる事は本当に素晴らしいなと思いました。

作業中に奥さんが未だに見つかっていない方のお話を聞かせていただきました。「奥さんがもしかしたらこの泥の下にいるかもしれない、何か一つでも思い出の品を見つけたい」このお話しを聞いて、ガレキは瓦礫ではないということを改めて実感しました。自分の大切な人がもしかしたらこの冷たい泥の中にいるかもしれない、そういう状況に自分になったら・・・と思うと本当に苦しいです。

作業終了後、地元の方が泥のついた合羽や長靴を洗う用にお水を貸してくださいました。帰りのバスの中で聞いて知ったのですが、とても快く貸して頂いた、とのことだったので、その方に直接お礼を言えてなかったのが反省です。また、バスに帰ると3人の運転手さんが泥を洗う場所、石鹸、ビニール袋、バス内は暖房も効いていて、どろどろで帰ってきてても困らないように用意して待っていてくださったいました。色んな方のお気持ちの陰で快適に過ごす事が出来たのだなと思ひました。「ありがとうございます」の反対の言葉は「当たり前」というのを聞いた事があります。私自身当たり前と思つて過ぎてしまつている事が多いなと改めて気付きました。

牡鹿の仮設商店街で頂いた魚のあら汁やお昼休憩に頂いた「くじらのしっぽ」のパンはとてもおいしかったです。仮設商店街ではお土産も買っ

てあつという間の1時間でした。こんな風においしい物を頂いたりして被災地の方に「ありがとう」と伝える。それで経済がよくなればお互い嬉しい気持ちになって一石二鳥だなと思いました。観光協会でボランティアされている方が、民宿なども頑張つて再開しつつあると言われていましたし、観光などで東北に来るのも一つの支援になるのだと感じました。

今回も大川小学校に連れて行って頂き、亡くなったお子さんに宛てたお母さんからのお手紙を読ませて頂きました。涙が止まらなかったです。真つ暗な中、大川小学校の前に立つと、悲しい、寂しい、恐ろしいような気持ちがさらに増すように感じました。「昼間や人前では大丈夫そうに見える人でも、夜に1人になると苦しんでいる」というお話を思い出しました。夜の被災地というのも私にとつては初めて見る被災地のひとつの景色になりました。今回も、ここに来た事は絶対に無駄にしませんという思いで手を合わせることにできませんでした。

被災地に連れて行って頂く度に、新しい学びを頂きます。また、何も分かってなかった自分に気付かせて頂いています。浅野さんが「やるべき」とは分かっているけど、やり方がわからない」とお話されていたと帰りのバスの体験発表の時に聞いて、被災された方の歯がゆさを感じました。

また復興には10年単位の時間がかかるというお話も聞きました。こういった状況の中で自分は何が出来るのか今後も考えて行きたいです。そしてたった数回被災地に行っただけで分かったつもりにならないよう、今後も学び続けなければならぬと思います。

この会に参加させて頂くと、もつと学ばないといけない事に気付きます、参加されている方、バスの運転手さん、被災地の方の暖かい気持ちを頂いて嬉しい気持ちになります。でも日常生活になると忘れてしまうのが自分です。そうならないよう、ひとつずつでも自分を変えていきたいです。このような素晴らしい会に今回も多くの方のお力と日本を美しくする会に寄せられた義援金のおかげで参加させて頂く事ができた事本当に感謝します。そして今回もたくさんの方と出会い、色々なことを教えて頂きました。人と人の出会いは本当に素敵だなと実感する事が出来ました。ありがとうございました。

★大阪府20代 女性★

私は今回が二回目の参加でした。一回目は9月22日から25日で、2日間現地に滞在することができました。それでもあつという間で自分ができることの少なさに帰るのが嫌だったので、

今回はその半分しかいることができないし、作業の時間となるとたったの4、5時間でした。バスの中でも、力まなくていい、一生懸命になりすぎず丁寧にお話がありました。それでも私はたくさんの人の協力とお金と気持ちで自分が来ていることや作業時間のことを考えると、ノンストップくらいの気持ちで動かないと思っていました。

今回は草の茂った水田での瓦礫撤去作業でした。まずは鎌で草を刈ってからでないと始められない、そして水田の広さと足場の悪さにひと刈りふた刈りで果てしなさを感じてしまいました。でも人数がいるというのは大きくて、気づけば草が刈れたところから次々と泥に埋もれたものを運び出していくことができました。途中、奥様が津波にのまれて行方不明になっているというお父さんからお話を聞きました。自衛隊に海の底や海岸を探してもらっても見つからなかった。可能性が残っているのはこの水田くらいということでした。それを聞くと今自分がしていることはただの作業ではないんだと、また改めて気持ちが引き締まりました。そのお話のあと私は草刈から、埋まっているものを拾い集めて分別場所まで運んでいくという作業に移ったのですが、泥が入ってぶよぶよになっている手袋や服、長靴などが埋まっているのを見つけたたびにもの凄くドキド

キシ、緊張しながら引つ張りました。その話を近くにいる先生にすると、「次見つけたら呼んで！そのときは一人じゃなくて一緒に引つ張ろう！」と言って下さって、とても心強かったです。

だんだん作業場所も広がってきたので分別場所まで運んでいく距離も長くなり、泥に足を取られるのですがに膝がガクガクしてきました。ノンストップと言いながら、そこで一度足を止めてしまいました。ふーっと深呼吸をしてふと後ろの道路の方を見ると、さっきのお父さんが傘をさしてじっと折るように立っていました。それを見るとまた足に力が入り、作業を続けることができました。

小雨が降ったり止んだりするなか他の団体さんのお力もあり、掘り出されたものはかなりの量になりました。少しずつ視界も開けてきましたが、その日の作業で奥様が見つかることはありませんでした。

活動を終え、地元の方やバスの運転手さんの優しさや気遣いで服をきれいにしてから、オープンしたばかりの仮設商店街に向かいました。そこで前回掃除をさせていただいた家の方と再会することができ、とても嬉しかったです。握手をする時、冷たい泥で冷えた手が一気に温まった気がしました。

話が戻ってこの日の朝、運転手さんが被害のひ

どかった門脇地区の方へバスで行ってくださいました。津波到達時刻で止まった時計、自分の生存と行き先が書かれた家の壁、津波で押し寄せた車が燃えて真っ黒になった学校、道の真ん中に転がっているベコベコにへこんだ大きな鉄の塊、山積みになった誰かが乗っていた車。テレビや写真で見えていても、実際に目の当たりにするともう言葉が出ませんでした。

ちょうど門脇地区を抜けるころ、横に止まった車の中の夫婦が手をつないで乗っているのが見えました。ほとんどの人が仮設住宅に入って、その反面で自殺をする人が増えていると聞きますが、あのようになんか一人でも多くの人が手を取り合って生きていてほしいと思います。そして私たちみたいに元気な人たちで手を取りに行かないといけないと思います。

また被災地に連れて行っていただき、本当にありがとうございました。

★★和歌山県30代 女性★★

第六回「被災地に学ぶ会」に参加させて頂いた今、本当に感謝の気持ちで一杯です。参加させて頂いたきつかけは、この会に何回か参加している友人の「被災地に行くからの経験や学びもすい」いけれど、一緒に行く人達からも本当にすごい気

付きや学びを得るよ」との言葉でした。

現地に着いてまだ被災した当時と全く変わらない風景が広がったままの場所を車中から目にした時にここに住んでいて今助かり生き残っている人達の気持ちを思うと胸がはりさけそうな気持ちになりました

今回私達が作業する場所は津波の被害でまだ誰も足を踏み入れていない手付かずのままの状態の水田（というか泥田）でした。場所一杯に生い茂っていた雑草を刈り取りながら出てきた様々な物（遺留物、家電物、布団、畳など）を運んでいきます。午前中はみんな頑張ろうみたいな感じで必死で作業に取り組んでいた感じだったのが、午後からは泥でとんでもない重さになっていくものは、リレー形式や何人かの力で運び、泥で足が取られる所は刈った雑草で道を作り……と自然と各自がいかに皆が安全に作業できるかを考えて動いていき、午前中と午後では全く動きが変わっていききました。

午前中、作業した場所の近くで家と奥様が流された方が来られて、いまだ奥様の遺体が見つかっておらず、この水田で見つかる可能性があるかもというお話があり、この方に取ってこの場所は大切な家族が眠っていらっしやるかも知れない場所だと思うと本当に大切な場所で仕事をさせて頂く気持ちでした。作業中皆の、自分に何が出

来るか、一緒にしている仲間がいかに動きやすいか、そして奥様が見つかるかもしれないと私達の作業を見つめていらっしやる男性の方の想いを考えながら動いているのがものすごく伝わってきて、心をひとつにした人間の素晴らしさ・力を感ずる事が出来ました。

大川小学校では、残されたご両親の方々の張り裂けそうな想い、そして子供達のもっと生きたかったという叫び、そして先生方の無念さなどの気持ちが一挙に込み上げてきて、涙が止まりませんでした。でも、今この場所に生きて立っている私が学び気付いた事は、『今生きていること。生かされていることその事実を全身全霊で受け止め感謝して、後悔ないように一瞬一瞬生きていくこと！』なんだという想いでした。

また、被災後に何百人もの方のお世話役をされていた浅野さんにお話を伺い、民間と行政の間にある温度差のあまりの違いに考えさせられましたしかるべき所だと思つて募金・義援金・物資を送つたからといつてそれが必要な場所に届いておらず、倉庫に眠つたままの状態。

浅野さんが「やる事はわかっているのにやり方がわからない。」というような事をおっしゃつていて私自身も本当にわかりませんが、でも問い続けて動き続けていきたく強く思いました。

そして私に元気をくれる大好きな言葉「見たい

と思う世界の変化にあなた自身がなりなさい。by マトハマ・ガンジー」を思い出しました。今回、時間にすればあつという間でしたが、ものすごく濃くもつたのではないほどの経験・気付き・感謝の想いを頂きました。

最後にこの会を援助してくださっている皆様・大谷先生・宮崎先生・神姫バスの3名の恵比寿様(笑)のような暖かな運転手の方々本当にありがとうございました。

今回は、今よりもっと大きく深く感じられ行動出来る自分になって参加させて頂けたらと思います。ありがとうございます。

★滋賀県40代 男性★

今回も大きな学びをいただきました。大谷先生を始めとする日本を美しくする会の皆様、また我々の活動を影ながら支援していただいている皆様のお陰でこのような学びがいただけただけでなくとも感謝しております。

さて、予定より少し早く宮城県に到着し、バスの運転手さんの計らいにより門脇小学校など津波の被害の大きかったところを車窓から見学させていただきました。小学校は焼けこげたまま、津波被害に遭つた箇所は更地のまま、瓦礫や廃車は積み上げたままと、8ヶ月も経つたのにまだまだ

だ復興とは言い難い状況が見受けられました。

そして、今回の活動は、田圃の中の瓦礫撤去と遺留品の搜索でした。雨の降る中、合羽に着替え田圃に入りました。慣れない泥沼に足を取られ、作業が思うように進みませんでした。そんな中元氣良く力を皆に与えてくれていたのが若者です。今回は申込者も多く、多くの年配の方が彼等に譲っていただいたと言うことでしたが、その甲斐あつて存分に力を發揮していました。二〇歳前後の大学生を、少し年上の社会人成り立ての先生方がリーダーシップを発揮し牽引している。若者達が自立して作業している、大きな瓦礫があると重さを競つて運んでいる、とても頼もしく感じました。彼等の頑張る様子は一日を通じて、みんなに力を与えていました。

午前中の作業は関東から来た学生を中心とするグループと約百名で作業をしました。彼等は午前の作業で帰りましたので、午後からの作業は我々だけにするものかと寂しさを感じていました。しかし、午後になるとどこからともなく別のボランティア団体の方々が来られ再び百名くらいでの作業となりました。中には個人で来られている方もあり、たいへんな作業を手伝おうという有志が続々と集まることに、日本人の底力を感じました。

考えてみれば、これだけたいへんな作業を前向

きにこなすのが日本人の強さではないかと感じました。例えば、外国であれば、学校でも掃除は掃除作業員の方の仕事で学生は基本的にしません。ところが日本人は、無償で掃除を行うだけでなく、掃除と向き合う中に自分自身が成長できる糧を見い出そうとしています。つまり、外国ではお金をもらわなくてはしないような仕事も、日本人は無償でするだけではなく、嫌々ではなく前向きな気持ちでできるところが強みだと思います。そして、そうすることで支援を受ける被災者の方の負担にならないように配慮もしている。そういう風に考えると、被災地に学ぶ会というものの凄さを改めて感じることができました。これぞまさしく、日本が世界に誇る文化だと思えます

★★奈良県20代 男性★★

第六回被災地に学ぶ会に参加させていただき、誠にありがとうございます。たくさんのお誘いがあるなかで、今回行かせていただいたことに感謝したいと思います。

大災害があつてから8カ月たつてようやく初めて被災地を実際に見ることができました。帰ってきてから一番の思ひは、「もっと早く自分の足で行けばよかった。今後も継続して見てみたい。」ということ。行きの尼崎の集合までは、とに

かく行きたい、行って何かを感じたい、という興味本位な部分もありました。仕事にも慣れてきてはいましたが、なにか平凡な毎日から脱却したいという、私情も混じつての参加でした。今となっては恥ずかしいばかりです。

石巻市内へ着いてから帰りのバスまで、ずっと自分がいるこの場所で津波があつたんだという情景を想像していました。言葉が出ませんでした。午前中の作業は楽しくできました。体を動かすこと、掃除することは好きだったので、ただ黙々と「頑張らねば」という思いでした。ただの「作業」になつてしまつていたんですね。しかし、奥さんがまだ見つかつていないという男性のお話を聞いてからは、違つた思いで物を運びました。微量ながらもなにか自分でも力になりたいという思いでした。そんな思いを多くの人が持つたからでしょうか。次第に協力して作業できていたと思います。「釘が出ているから気を付けて」、「これから俺が運ぶわ」、そんな言葉の一つ一つから、協力することの大切さを身を持って感じることができました。

行った前日から開かれた商店街では、たくさんの方とお話できました。このように再び店を構えることができることを、本当に喜んでおられていました。また、温泉でお会いした男性と、「絆」についてお話をさせていただきました。家族との絆

の大切さを教えていただいたとともに、私も家族のありがたさを感じました。このように現地の方と話すことで、自分にとって当たり前のことが、当たり前でないということを教えていただきました。

大川小学校を訪れた時の思いは、忘れることができません。亡くなった児童の親御さんが子どもに向けて書かれた手紙は、目を背けずに読みました。少しづつでも、前に進まなければならないです。この場所では何も考えることができなかったんですね。この場所では何も考えることができなかったんですが、帰りのバスで大谷先生がおつしやつていた、クラスみんなが「おつてくれてありがとう」という言葉は、とても心に残っています。

今回行かせていただいて、本当にたくさんの方から多くのことを学ばせていただきました。すごいと思えないような考え方も知ることができました。知れば知るほど、「自分は弱い」ということも感じました。そんなたくさんの方の学びをどう活かすかについては、具体的にまだこれというものはありません。ただ、人との絆で信じられないようなエネルギーが生まれることを体感できたので、子どもたちにも同じ思いを共感できるように、「一人一人が力を出せる状態を、みんなで出せるクラス」を作っていきたいと思っています。最後になりましたが、バスの運転手さんをはじめ、

多くの方に感謝したいと思います。ありがとうございます。ございました。

★★京都府20代 女性★★

私は、京都で万華鏡コミュニケーションを主宰されている藤尾まさよさんとのご縁で、今後、被災地でも万華鏡と一緒にしてくれる拠点を作りたいという事で今回参加させていただくことになりました。

震災後、石巻市内に住み現地で活動されているボランティアの方とお会いし、石巻市開成地区仮設第一団地の集会所で開催された手芸イベントと一緒に参加させていただきました。催しが行われている部屋の横、六帖ほどの部屋が子供の遊び場となりました。今回は、遊びに来る子供たちの面倒を見るということが主な活動でした。集会所には、小学生低学年の子供が4人ほど集まっています。集まっていた子どもたちは、DSに熱中していたり、押入れに隠れていたり…。DSに集中している子どもに、他の子どもが声をかけても相手にしてもらえず喧嘩になったり…。なかなか、子ども同士がうまくコミュニケーションをとれる感じではありませんでした。そこで、仮設住宅などに置いてもらうために持参していたビーズやドライフラワーを入れたカレイド万華鏡

と、見たものすべてが万華鏡の映像となるテレビド万華鏡を子供たちに見てもらいました。すると、「うあ綺麗！なにこれ〜！」と目を輝かせて覗いていました。「自分たちで作ってみる？」と誘うと、興味を持つてくれる子がいて一緒に作る事が出来ました。また、最初は作らないと言っていた子どもも作り出しました。完成すると、お互い自慢し合うように見せ合う姿がみられました。この時、最初に出会った時には感じる事が出来なかった穏やかな空気が流れた気がしました。帰りに道の駅で浅野さんにお会いでき、「大きな仮設住宅には、ボランティアがボランティアを呼び支援が進んでいるけれど、小さな場所や不便なところには、人手が全然いかない。」というお話が印象に残りました。今回、万華鏡の活動をさせていただいたけれど、それは、ほんの一部で、もっと必要としている人達にお届けすることのむずかしさを感じました。帰りに多賀から車に乗せて頂いた音川先生や、藤尾さんとお話をさせていただけうちに、少しずつこの時感じたことが整理されていきました。まずは、大きな場所から支援をしていき、そこに住んでおられる方の遠く離れてしまった大切な人に送ってもらえたりして少しずつでも広がっていくと思います。そして、今後何年も続けていく大切さも実感しました。

今回の被災地に学ぶ会に参加させていただいて、本当にたくさんのお話を教えていただきました。行き帰りですが一緒に出来なかったのですが、みなさんの体験談を聞かせていただけただけでも、本当に自分は生かされていることに感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、バスで一緒の方を含め、現地で出会ったボランティアの方々の多くが私と同世代でした。短い時間でしたが、一緒に時間を共有し、自分ももっと動いていかないと！とパワーをたくさん頂きました。本当にありがとうございます。ございました。

最後になりましたが、一丸となって牡鹿半島の瓦礫作業に向われ、参加を希望されていても行けない方がたくさんいらっしゃる中、単独行動での参加を認めてくださった大谷先生に厚くお礼申し上げます。そして、途中下車をする私にむかって「頑張ってきてね。」「いってらっしゃい。」と手を振ってみなさん見送っていただきました。帰りの道の駅で合流させて頂いた時には「お帰りなさい。」「お疲れ様！」と暖かい声をかけて頂いたことに感動しました。本当にありがとうございます。ございました。

★★兵庫県20代 男性★★

今回は、第六回被災地に学ぶ会に参加させていただきありがとうございました。

私は、今年の3月末にも石巻に来させていただきました。あれからどうなっただろうと思いなながら、バスから石巻の街の中心部の景色を見ました。すると、きれいな街並みになっていて少しずつ復興しているんだなうれしく思いました。しかし、そこから少し海側に近づくとまだまだ手つかずなところもあることがわかりました。門脇小学校付近の景色を見て言葉が思いつきませんでした。やはり、復興にはまだまだ人もお金も時間もかかるということを開きあたりにしました。

そこから今回の作業現場である場所に着きました。「畑」と聞きましたが、そこは「葦」が生い茂っていて、茶碗、皿などの生活用品、スリッパ、長靴、ストーブ、窓のさん、トラック、船などいろいろなもの放置されたままで、まさに手つかずな場所でした。そこに埼玉チーム、また他のグループも加わり、総勢150人以上で作業をしていきました。するとどんどん視界が開けていき、はじめとは比べ物にならないほどきれいな広場が変わっていました。特に大学生のグループは持ち前の若さと勢いで本当によくがんばっていました。私は、人間一人の力はないものではないけれど、その力が多数集まり、同じ目標に向

かえばこれだけ大きな成果が表れるということを目と体で学ばせていただきました。

帰りのバスの中では、みなさんからお話を聞かせていただきました。同じ体験をしても、人によって感じ方も学んだことも違い、大変勉強になりました。

最後になりましたが、大谷先生をはじめ、バスの運転手さん、今回いっしょに参加された皆様、支援してくださった「日本を美しくする会」の皆様のおかげで多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。また、参加させていたいただきたいと思えます。

★★大阪府40代 男性★★

今回、震災後に初めて東北に入らせていただきボランティア活動に参加させていただきました。ご一緒させていただきました方々には、一般参加である私を温かくお迎えいただき、本当に感謝しております。

戻ってきてから数日しか経っておりませんが、気持ちを整えることはできておりませんが、いくつかの想いをお話させていただきます。

1. 【ただの瓦礫ではないこと】

牡鹿での活動は、津波で被害を受けた水田での

活動であり、近くの被災者の方の家財道具が流れ込んでいた状況でした。活動当初には、瓦礫の中からハンドバック等を発見したのですが、「モノ」としか見ていませんでした。

しかし、活動途中に、近くの被災者の方が来られて、「何かうちのものを見つけてほしい」とおっしゃってからは、貯金箱やお皿など、見つかるものすべてが、ただのモノではなく、かけがえのない歴史をもつものとしてとらえることができました。

2. 【教訓にできるかということ】

大川小学校を訪問し、そこで折り、感じたことは、今回の震災をめぐる全ての悲しい出来事を、今後の教訓にできるかということでした。

すなわち、万一の事態を想定し、そのためにできる最善のことを、勇気をもって決断し、実行する訓練を、日常から、積んでおくことが重要だと感じました。

3. 【復興のために必要なこと】

被災地で苦勞されている浅野さんの話をお聞きして、改めて「行政、民間（業者）、ボランティア」の役割分担の大切さと、それを最適配分して、一日でも早い復興を実現することが大事であると感じました。

この点では、私はボランティアとして活動するだけで満足するのではなく、行政を動かすための

活動をし、寄付だけでなく増税等を受け入れ復興のための財源を確保し、民間活力と専門能力を最大限に活用することが必要であると感じました。

被災地を訪れて、そこで見て・聞いて・感じることを通じて得た経験について、今回学んだ「生き様は日常にあり」を肝に銘じて、今後の私の日常の生き様に生かしていきたいと思えます。

★★奈良県20代 男性★★

第五回に引き続き、被災地に学ぶ会に参加させていただき本当に感謝しています。今回は自身、被災地に行かせていただくのは三回目、また今までは違った思いで行かせていただきました。

初めて夏に行ったときは、ただただ「作業」と呼んでしまうような作業をこなし、現実を目の当たりにして帰ってきたというのが正直な感想でした。しかし、先月の第5回被災地に学ぶ会を通し、たくさんのことを学び「作業」ではなく全てが「学ぶ時間」であること、全てが「意味のある時間」であることを学びました。また前回改めて感じた大きなことが「出逢いの素晴らしさ」「チーム」ということです。今回は実践を通じて、自分に足りない何かを感じられるようにという思いを持ち参加しました。

まず石巻に着き、石巻の中でも壊滅状態にある地域の状況を見る時間がありました。そこは門脇小学校という学校の全てが津波により流されてきた車などが原因で引火し全焼した学校があったり、ほかにも個人宅はほとんどなく、自分のイメージでは戦争の後の焼け野原のように感じる場所でした。8月に一人で歩いた場所であり、少しは復興の手が入り変わっているかと思いましたが、以前と比べ僕の間からは大きな変化はなく、流出物の山や車の山積みがそのままなどさみしい光景が広がりました。8月からは3カ月以上経っているけど、変わらない現実がありました。

前回に続き牡鹿半島で活動になりました。1か月前のボランティアセンターの様子は少し片付いていて、その前に仮設商店街が行った前日からオープンということであれらしいニュースでした。活動後、寄れるということですがごく楽しみになりました。今回の活動場所は、重機以外の人の手が入っていない水田でした。水田といっても津波により水田には見えない場所でした。草は茂っており、漁網などが目で見てわかる状況でした。自分の中では、前回の活動からも、今回のバスでの大谷先生からの話からもあった「チーム」ということを頭に置き活動に入りました。協力して午前の活動が終わり、昼休憩には仮設商店街でも出されている現地の方々がいろいろな思いを込めて作

ったパンをいただきました。ただコンビニで買ったパンであれば食べて終わりになると思うけど、被災地の方が特別にいろいろな思いを込めて作ってくださったパンは、とてもおいしく大きなパワーをもらいました。

午後からの活動前に、現地でも奥様が見つからない方のお話がありました。それは自分にとってわかっていなかったことであっても衝撃なことで、話を理解して飲み込むまでに時間がかかりました。どんな小さなことでもいいから手がかりがあれば教えてほしいとのことで、もしかすると動している土の下に奥様に関係することがあるかもしれないとおっしゃっていました。その話も機により一致団結できたかもしれません。午前よりも声をかけてより協力的に活動できていたように感じます。列を作り運んだり、重いものを学生を中心に運んだりチームの素晴らしさを痛感しました。足下が良くない中、精一杯無理をせず活動できました。

一日の活動の中で感じたことです。「いいねいにものを扱う」ということがまだまだできていないという自分に気づけました。前回で学んだチームで協力するということは初めから意識できていたのですが、「瓦礫は瓦礫ではなく大切なもの」と常に頭に置いて活動していたつもりで終わっていました。流出物を木片や鉄に分けている山の

ところまで運んで、そこで最後に投げてしまっていました。宮崎先生がその場において大切にしているものを積んでいる姿から自分との違いに気づくことができました。活動中もそのことに気づけて行動を変えたことは自分の中で大きなことで、大きく変わったことのように感じます。そこからはものは投げないでいねいに扱うことを周りの方にも伝えることができ、初め自分もできていないことであつたけれど、同じ意識を持って良かったです。

活動後、商店街に寄ることができ、現地の方の温もりと強いパワーに触れることができました。会話している時間では常に笑顔になれていました。

その後、大川小学校に行かせていただきましたが、前回初めて行かせていただいたときから大川小学校には強く特別な思いがあります。自分の無力さと弱さと小ささを知ることができた場所であり、考えるきっかけをいただいた場所です。小学校に着いたときには辺りは真つ暗で、ただ学校側から訪問した方々めがけてライトの光が灯っていました。電気ガス水道が断たれている場所に光があり、それはおそらく亡くなった児童の親御さんがいろいろな思いで置かれているものだと思います。大谷先生がおっしゃっていたように本当に子どもたちの光のように感じました。自分自

身はバスを降りるとともに、何か強い風が体にザツときて今回もまた強いパンチを打たれたような気持ちになりました。涙があふれ、ただ何も考えなかったのが本当です。祭壇にある親御さんからの手紙の前には前回は近付くこともできませんでした。今回は少し読ませていただくつもりでしたが、前まで行くと目の前が真つ白になり、また今の自分には読むことはできませんでした。今回もただ手を合わせることはできず、体が急に疲れてバスに乗りました。どう伝えていいか言葉にできませんが、子どもたちが毎回私たちに何かを伝えていようような気がしてならないです。これからも行かせていただきたい場所です。

今回も被災地、被災地で出会った方々、いっしょに学びに行った方々、バスの運転手さん、行くことを受け入れてくれていた家族・学校の先生、自分の周りにいるすべての人に支えられながら活動することができました。本当に感謝しています。たくさん学びが得られ、たくさん考えることができ、たくさんの人に出来ること、これからは精一杯そのときそのときをチャレンジしていきたいと思えます。ありがとうございます。

★★大阪府20代 女性★★

私は今回で3回目の参加となりましたが、今回も学ぶべきこと絶えない3日となりました。あのバスに乗れたこと、とても嬉しく感じています。東北では門脇小学校周辺へバスをまわして頂き、ボランティアセンターへ出向き田園での作業、仮設商店街訪問、大川小学校にて黙祷した後、道の駅にて疲れを癒し、バスにて大阪に戻るというスケジュールでした。

門脇小学校ではまたもや衝撃を受けました。火事によって黒くなった門脇小学校の建物もそうですが、その周辺はかなりの広範囲がまるで焼け野原のように何もかもなくなっていました。車が何台も何百台も積まれ、登れそうな瓦礫の山があり、とても人が住んでいたとは思えず、そしてこれから住めるとも考えられないくらい何もかもがゼロ以下の状態のように思えました。

田園での作業は、草を刈りながら、泥で重くなった養殖用のカキなどを分別して運んだりしました。ある程度作業が済んで辺りを見渡すと、最初には視界に入らなかつた大きな船や車もあらわになっていました。草で隠れていた鹿の糞、沢山のロープ、石油ストーブなども姿を現しました。今回も自然と瓦礫リレーができ、物を拾いリレーに託す人・リレーに加わる人・リレーの足場に葦を置いて作業しやすいようにする人など頭で考

えるより自然と体が動き、そういった作業がこころをひとつにさせていたように思います。その田園の向かいにあるもお家、バスの運転手さんも汚れをおとすための水やブラシ、袋など貸して下さったり用意してくださっていても感激しました。ボランテニアに来てはいるはずがボランテニアされていることが多い日々ですが、類は友を呼び、優しい心は優しい心を産むということならば、それはそれでいいな、間違っではないかな、と思ったりしました。

仮設商店街は時間の経過・復興を感じさせました。東北の方がものを売ったり何かを購入するところが、東北の方々が自分たちの足で歩いていくの一步だと本当に思います。

3度目の大川小学校は暗闇ということでも全く雰囲気異なっていました。絶えず飾られている花・メッセージ、その周囲の明かりには、冷やかで温かい、また新しい一面をみたような気がしました。また何かの機会があれば何度でも東北に出向きたいと思えます。本当にありがとうございます。

★★奈良県20代 男性★★

〈宮城県石巻へ〉

「被災地に自分ができることはないか」と問い、

石巻に行くことを決めました。

18日の夜に尼崎を出て、翌朝7時に石巻市内に入りました。北上川沿いを走ると、川の向こうに高く、大きながれきの山が目飛び込んできました。以前は家々が建ち並んでいたであろう市街地に人の気配はありません。草が自由気ままに生え、がれきが放置された野原となっていました。テレビでしか見たことのない戦後の風景のようです。バスの窓を開けると、煙くさが漂います。この門脇地区は、津波で押し寄せたがれきに火がつき、その後1週間燃え続けたとのこと。

無残に焼けた小学校の前を通る時、「もし自分の学校がこんな姿に：」と思うと言葉が出ませんでした。あの煙くさがここに住んでいた人々、ここを出た人々の悲しみにさえ思えました。

〈作業現場へ〉

牡鹿半島を走り、8時半にボランテニアセンターに着きました。かつての公民館には震災後、約400人の遺体が安置されました。そして頂いた仕事は、元は田んぼだった所のがれき撤去作業でした。力仕事なら！と行ってみると、そこは全く手つかずの状態でした。街と比べると後回しにされている現実がありました。

カキ養殖用の貝がら、ワイヤーが絡まった魚網、釘の突き出た木片、ガードレール、金属類、給湯器に始まり、たたみや毛布、バッグ、ズボン、披

露宴のビデオなど生活感ある物が出てきました。降り出した雨の中を、草を刈っては埋まっている物を掘り起こす作業の繰り返しをただ一所懸命やりました。：やっている気になっていました。作業中にご老人が来られて、話をされた時でした。

「行方不明の妻がこの辺にいるかもしれない。妻に繋がる物があれば何でもいいから教えてほしい。」

ハッとしました。自分の踏み出す1歩先に、誰かがいるかもしれない。誰かの大切な人：思いの詰まった物が：。『がれきは、がれきではない』ことに気づかされました。日頃からそこまで思いを巡らせていたでしょうか。人も物を大切に！と言っている自分が誰より無頓着で恥ずかしくなりました。

〈仮設商店街で〉

作業後は商店街に寄り、パンやカツオ丼に舌鼓を打ちました。話をさせていただと明るいばかりでした。「この町で生きていく」そんな思いを持って商店街をオープンされたのではないかと思います。あの逆境の中で再び前を向いて歩き出し、闘われている姿に力を頂きました。

〈大川小学校〉

そして、最後は大川小学校にて合掌をさせていただきますました。私には、あの空間だけが時間が止

まったくままに感じました。変な言い方かもしれませんが、せんがどこか別の次元にいるような感じでした。あの学び舎で手を挙げている子どもの姿や校庭を走る姿が目に見え、どうしようもない気持ちになりました。私は、この時までそこに目を向けていませんでした。被災地に心を寄せていなかったということ。甘い人間です。

水に飲まれて苦しんで亡くなった子や先生と、自分に何の違いがあったでしょう。ただ住んでいた場所が違っただけです。そこに生と死ほどの差が生まれるのはおかしいのに：でも、これが現実です。だから、私達は亡くなられた方の命の分まで生きなければなりません。身近にいる人を大切にして、生きなければならぬと思いました。今回わずか2日間にも関わらず、いろんな方が背中を押してくれました。不安もありましたが、学級の子、バスの運転手さん、同じ志のもとに一緒に作業をしたメンバー、参加を譲ってくれた方のおかげで、私は被災地に足を運ぶことができました。ありがとうございます。

★★兵庫県30代 男性★★

「第六回被災地に学ぶ会」に参加させていただき、有り難うございました。私にとって大変貴重な体験となり、こういつた学びの場を用意してく

ださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

11月18日(金)の夕方6時半に尼崎駅に集合し、バスで出発しました。そのバスの中で参加者の自己紹介があり、それぞれがどんな想いでこの会に参加したのかを自分の言葉で話されていて、私も自分の気持ちをたどたどしいながらも話しました。

土曜日の早朝に石巻に着きました。バスの運転手の方々がせまい道にもかかわらず、被災状況の厳しい所へバスを走らせて下さりました。曇り空の下、バスの中から見た光景の凄惨さには言葉がありませんでした。

牡鹿半島にあるボランティアセンターに行き着替えをしました。さらにバスで移動した先の水田で瓦礫の撤去作業を始めました。様々な物が津波で流されてきていて、中には大人が10人以上でやっと運べるものもあり、改めて津波の力の凄さを実感しました。水田の土の中からぬき出した瓦礫を一か所に運び、それぞれ「木材」「金属類」「プラスチック・発泡スチロール」「瓦・モルタル」「布や網」「貝殻」などに分別していきました。関西以外にも埼玉や東松山など多くの地域からボランティアの人が来ていて、リレーで物を運んだりしながら力を合わせて瓦礫撤去の作業をしていきました。雨も少し降っていて地面がぬかるんでいたので、足元が悪く、物を運んだりす

るのが大変だったので、重そうな物を持っていく人にはお互いに手を差し出し、声を掛け、助け合いながら作業をしていきました。初めて会う人達なのですが、一つの目的を持ってあのよう協力し合えたというのは、とてもよい経験になりました。

休憩の時に、地元の方からお話を聞く機会がありました。奥さんが津波に流されて水田から奥さんのご遺体が出てくるかもしれないこと、また、思い出のある物、漁業で使える物が出てくるかもしれないので瓦礫と言っても大切に扱ってほしいということをお話してくださいました。奥さんは何かを取りに家に戻られて、その途中で津波に流されてしまったそうで、とてもつらいということがその方の表情に表れていました。また、水田の中には瓦、たたみ、船のいかり、花瓶、はかり、給湯器、冷蔵庫、テレビ、あみ、人形、着物などが流されてきていて、それらの物は本来の持ち主にとっては、生活を共にしてきた、かけがえのない物であり、新聞やインターネットに出ている「瓦礫」という言葉だけでは知ることのできない意味があるんだということが少しでも分かりました。

夕方になって作業が終わった後に、ちょうど金曜日にオープンしたばかりの仮設商店街に行きました。経済的復興の第一歩ということで、どの

お店の方も表情が明るく、お店をまた開いてお客さんを迎えらるる喜びにあふれていました。私はおいしいラーメンをいただいて、冷えた体をあためました。帰りのバスの中で、この商店街のことを感想で述べられていた方が言われていたこと

とが心に残ったのですが、「地元の人は今回の震災があつて（支援に対して）『ありがとう』を言うことはあつても、『ありがとう』と言われる機会が少ないんじゃないか、商店街ができて、『ありがとう』『ごちそうさま』と人から言われることが大切だと思う」と言われていました。商店街が被災地にできるということは、経済的な復興だけではなく、心の面でも大きな意味があるんだと思いました。それと同時に私は恥ずかしくなりました。ラーメンを食べ、お代を払った後に、もつとしつかり「ごちそうさまでした、おいしかったです。」と感謝の気持ちを伝えないといけなかったのではないかと。

商店街を後にして、大川小学校に行きました。大川小学校は、報道でもあつたように、多くの子ども、教師が亡くなった小学校です。その小学校の前に祭壇があり、そこで亡くなった方のご冥福をお祈りしました。夕方で大変寒かつたのですが、そこで津波にのみ込まれた子どもたちや教師は比べようもないくらい冷たく、苦しかったことを考えるとつらい気持ちになりました。今は使われ

ていない小学校の校舎を見て、また祭壇に置かれた、亡くなった子どもにあてた保護者の方の手紙を読むと、子どもたちが元気に登校して、にぎやかな声の聞こえるふだんの生活の有り難さをおためて感じました。

夜に石巻を出て、バスの中で参加者の多様な感想を聞きましたが、素直に実直にご自身の気持ちを語られていました。こんな風に自分の気持ちを語れる場がある、ということの有り難さを感じました。私の拙い感想もバスの中の皆さんは一生懸命に聞いてくれていたように思います。

日曜日の朝に尼崎に着きました。短い滞在時間でしたが、私にとって多くの学びがありました。今回参加させていただいた意味をよく考えて、自分の人生に生かしていくとともに、教師として子どもたちにも少しでも伝えていければと思います。

★★大阪府20代 男性★★

僕は今回初めて「被災地に学ぶ会」に参加させていただきました。被災地に行く前は本当にテレビや新聞などで見ている状況が本当にあるのかどうか信じられなくて言い方は良くないですが、楽しみな気持ちが正直ありました。

JR尼崎駅から石巻までの片道13時間、往復

で26時間の長時間を安全運転していただいた3名の運転手さんには感謝の気持ちでいっぱいです。尼崎駅から一緒に乗った人は、産大の野球部と関西国際大学の野球部2名以外はほとんどが小、中、高の先生方ばかりでした。移動中のバスの中で自己紹介をした時に、自己紹介が全員終わるのに4時間ぐらいかかりました。時間の長さではなく一人一人の思いが熱くこの時間になったのだと感じました。

いざ被災地に着いて、最初は被害の大きかった牡鹿をバスで通って見た時に本当に衝撃を受けました。行く前は多少なりとも疑っていた部分はあつたんですけど本当に目の当たりした時は言葉が失いました。周りの家や建物が何もなく瓦礫が積み上げられている現状ばかりでした。

僕は、まだ手がつけられていなかった水田の作業をさせていただきました。そこはすぐ近くに海があつて、被害の大きな場所でした。その日は天候も悪く雨も降っていましたが誰も文句や私語をする事なくもくと作業に打ち込んでいました。最初は状況がひどすぎて何から手をつければいいのか分からず戸惑っていた自分がいました。でも周りを見てみると泥だらけになりながら必死に作業している人ばかりだったので僕は目の前にある事をしよう！と思い重たい物を持っている人がいれば一緒に持ったり、運んでる人が

いれば道をあげたりなど自分にできる事は精一杯やりました。そうしていると自然と作業もはかどり午前中だけでかなり綺麗になりました。午前中の作業では僕達だけではなく他府県や海外からも来ていて全員合わせて200人ぐらいで午前中の作業をしました。そこでやっぱり思ったのは他府県とか海外とか関係なく被災地に対する思いは全員一緒なんだなと感じ嬉しかったです。

午後からの作業では人数も減り、作業の仕方も変えて一例に並んでゴミなどをリレーみたいに運んでいくとスムーズに作業が進んでとても良かったなと思いました。僕は午後からは草刈りや草とやっていますでしたが、草を刈るとそこからまたゴミや生活用品など色々な物が出てきて、見えないところにはまだまだたくさん残っているなど思い自然と手が動きました。その水田には車や船など普通では考えられない物まで流れてきており、また木の上には布団が引つ掛かってぶら下がっていたりと津波の強さに衝撃を受けました。昼休憩を含めて5時間ぐらい作業をさせてもらってまだ全てが綺麗にはなっていないかもしれませんが現時よりは比べものにならないぐらい綺麗になった水田を見ると嬉しくなりました。

作業が終わってからは仮設の商店街に行き、そこで働いている人達を話をして僕達を元氣や勇氣を与えようと思っていたけど話をしてしていると

そこにいる人達の頑張っている姿や笑顔を見ると逆に笑顔をもらいました。家や家族を失った人達もいる中で今を必死に生きている姿を見るとすごく込み上げてくるものがありました。

商店街の後は大川小学校に行きました。夜だったので全体は見えなかったですが、被害の大きさは肌で感じれました。正直言つて言葉を失い何もできない自分がいました。

今回自分は初めて「被災地に学ぶ会」に参加させていたただき短い時間ではありましたがとてもなく大きな財産になりました。でも1回だけではまだ被災地の現状は理解できていないと思います。何回か回数を重ねないと分からない事はたくさんあると思います。震災から8ヶ月以上経ってだんだん被災地へのニュースなどが減ってきているのが悲しいです。だから僕も伝えられる事があれば知らない人に伝えていきたいと思えます。また行ける機会があれば是非、積極的に「被災地に学ぶ会」に参加させていただきたいです。本当に貴重な経験になりました。ありがとうございます。

★大阪府20代 男性★

11月18日から20日まで『被災地に学ぶ会』に野球部から10名参加させていただきました。

自分自身このようなボランティア活動に参加するのは初めての事でした。今回テーマを決めて被災地に行き『自分ができる事は全力でやる』という気持ちで行いました。行きのバスの中で大谷先生がボランティアをするのではなく被災地という場所をお借りして学ばせて頂くことをおっしゃっていました。

次の朝、石巻に入つて自分が思っている以上に石巻は荒れていて地平線が続く光景でした。テレビや新聞を見ているのと実際に足を運ぶのでは全然違いました。今も瓦礫の山や車の山積みなど傷跡という生々しいものを見て胸が傷みました。牡鹿センターに着いたときまだ、言葉が出てきませんでした。バスをおりたときなにかわからないですけど、感じるものはありました。今回は誰も手をつけていない田んぼの撤去作業でした。田んぼの中には船が横転したり、車もありました。向こうで埼玉県からきたボランティア活動の人達と作業して重たい物も協力して運んだり、リレーして運んだり、草刈りをして足場を作ったりで日本人の力はすごいと感じました。みなさんの知識が豊富でそこでも勉強になりました。その場所に住んでいたおじさんの話を聞いて何か見つけてあげたいって気持ちに変わっていく自分を見つけて被災地に行つて成長できたと思います。大人数で作業しても1日では終わりませんでした。

あとから団体が作業していて一体感を感じました。

そこから仮設の商店街に行き、お店の人とお話しをしたり、心境を伺う事ができてみなさんも前に進んでいました。

その後大川小学校に着いて全員で一言も話さず黙祷を捧げて、ご冥福をお祈りさせてもらいました。ご両親の手紙を読んで胸が熱くなつて小学校も震災の前まで楽しく通っていたんだなって思うと言葉が出てきませんでした。大谷先生もおっしゃっていましたが、あの電気は子供達がつけているんじゃないかと言っていました。僕もそう思います。

帰りのバスでは体験の感想を話しました。何か感じる事があり自然と出た事だと思えます。今回被災地に行かせていただいて本当にたくさんのお話を学べました。物を大切に扱う気持ち、ただ生きているのではなくもっと大切に毎日を生きる事、感謝の気持ちをもっと持つ事。それにバスの運転手さんは長い時間を運転していただいて、降りる度にお疲れ様でしたの一言を毎回かけていただき、最後まで安全にお送りしていただき本当にありがとうございます。

野球を通じてボランティア活動ができ、先生方と出会えた事が嬉しく思います。団体で作業する。一人では決してできません。野球も同じです。野

球部も何か得てきていると思えます。

浅野さんも復興には10年以上かかるとおっしゃっていました。今回だけではなく、二度三度行って自分を大きく成長できたらと思います。今回貴重な経験をさせて頂きましたし、これからの人生に必ず活かしていきたいと思えます。短い時間でしたが本当にありがとうございました。

★★大阪府20代 男性★★

先日の学園際での義援金集めのリーダーを務めさせて頂きました。

今回、私が被災地へ行かせていただいたのは2回目でした。前回は石巻工業高校さんや、地元の小中学生を対象に野球教室をやらせていただいたり、瓦礫撤去などの作業をさせて頂きました。その中で自分のさせて頂いたことに物足りなさを感じました。もっと東北の方々のために何かできないかという思いを持つようにもなりました。そして、今回また行く機会を作っていただくことができ、自分の中で産大の部員代表として責任を持ち、できることを一生懸命やろうという思いで参加させて頂きました。

宮城県の石巻市ではまだまだ復興が遅れている地域がありました。その光景を見ると胸が痛くなりましたし、もし自分の住んでいる街が同じよ

うな被害にあつたらと思うと本当に恐ろしくなりました。東北に住む方々がその現実には立ち向かって生きて行く姿には本当に強さを感じます。ましてや私より遥かに年齢の低い子供達がたくさんいると考えると、私も今後生きて行く人生で甘えていられないという気持ちが強くなりました。

今回瓦礫撤去の作業をさせて頂いたのは、まだ手の付けられない田んぼでした。作業場に着き辺りを見渡すと、津波により流されてきた物がたくさんありました。漁業に使われる網や家庭で使われる物、個人の私物などが田んぼ一面に広がっていました。現地では私達「被災地に学ぶ会」の他、埼玉から来られたボランティア団体の方々と一緒に作業をさせて頂きました。

その作業中に私は感動したことがあります。それはチームワークです。「被災地に学ぶ会」の中でも初対面の方がいましたが、埼玉から来られた方々は全員が初対面です。それを感じさせないほどのチームワークがこの時にはありました。作業前にはいくつかのグループに分け、そこで各自の役割を決め行動をするといったことが素早くできました。これは一人一人が責任を持って、とにかく動くという気持ちがあつたからだと思います。そして、大人数の中リーダーシップをとって下さった大谷先生や埼玉の代表の方のおか

げでもあります。この機会で本当に大人の方々はすごいなと思いました。リーダーシップの取り方、話し方、話しの聞き方、判断力、工夫など私達にはまだまだできていないことが当たり前のようになっていきました。それを見ていただけで私にとってはすごい学びになりました。私自身このようなことが当たり前にできる大人になりたいと強く思いました。

作業後には牡鹿半島にできた仮設商店街を回らせていただきました。そこで前回行かせていただいた時にお家の掃除をさせていただいたので、そこに住んでいらしたお婆さんが店を開いていました。私のことを覚えていて下さり「ありがとう」と言っていたことが本当に嬉しかったのです。こんな私でも人の役に立てたのだなと思うと、本当に行かせていただけてよかったなと思いました。東北はまだまだ復興が行き届いていない地域もあります。何十年と復興には時間がかかりますが、私はできる限りその力になりたいと思っています。小さなことですが、その積み重ねが大きな力になるということを実感することができた一日になりました。

最後に今回東北へ行かせていただく段取りし下された「被災地に学ぶ会」の方々、帰りまで私達を安全にバスに乗せて下さった運転手さん。本当に感謝しています。ありがとうございました。

★大阪府20代 男性★

今回初めて「被災地に学ぶ会」に参加させていただきました。自分は被災地に行ってみたい。と言う気持ちしかありませんでした。学ぶ気持ちではなく、ボランティアに行く気持ちでした。その気持ちの違いをバスに乗って先生方の話を聞いて間違っていた事に気がつきました。先生方の話を聞いて被災地で学ばしてもらおう。成長して帰ろう。と思いました。

朝、門脇地区という所をバスで通り全く言葉にならなかったです。テレビで観ていた光景がそのままでした。その後牡鹿半島に入り作業場所の水田に行きました。水田を見て思ったのは1日で綺麗になるのかでした。埼玉のボランティアチームも来ていて一緒に作業をしました。水田に入ると泥濘が凄く足を取られ作業をするのが大変でした。若い者は大きな物担当になり大きな物を探してはしごを見つけて持って行きました。布川さんという現地の人に「わしのはしごや」と言ってもらった時は持って行ってよかった。と思いました。布川さんは少し話をしてくれました。布川さんの奥さんはまだ行方不明の状態だと言っていました。自分はなにか布川さん夫婦の物も探しながら作業をしました。でも大きな物はみつかったも布川さん夫婦の物はみつけない事ができませんでした。

午後からはリレーで荷物を協力して運び団結力を感じました。午後の作業も終わって上から水田を見ると来たときとは見違えるように綺麗になっていました。でも何かまだできるような気がしました。

その後仮設商店街に行かしてもらいラーメンを食べさせていただきました。店のお父さん、お母さんが震災の事など話をしていましたが、凄く明るくて元気なお父さんとお母さんで元気をもらいました。まだまだ時間がかかると思いますが復興が進んで活気のある商店街になって欲しいです。

大川小学校に行った時はただ何も言葉がでない。これが正直な気持ちでした。置かれているお父さんやお母さんからの手紙も読む事ができなくて、ただ立っているしかできませんでした。帰りのバスで感想を言う時間がありました。先生方の話を聞いて自分もいつかはあんな考え方で物事を考えたりできるのかな。など思いました。1日であれだけ多くの話を聞けるだけでも良い経験ができました。

自分は今回「被災地に学ぶ会」に参加させてもらって、実際まだまだ復興作業が必要な所の方が多し事がわかり一回行っただけで何とかなる事ではなく、これからも続けていかないと感じました。自分自身は人が団結した時の力の大きさ、

考え方、自分の弱さを学べました。学んだプラスの事はほとんど伸ばして行って、マイナスの事はプラスに変えられるように頑張っていきたいです。他にも学んだ事はありますがこれからわかっていければ良いと思います。被災地に学ぶ会に参加させていただきありがとうございます。また参加してもらえるのであれば是非参加させてもらいたいです。ありがとうございます。

★大阪府20代 男性★

18日の晩から石巻へ行かせて頂きました。当初の自分は何が出来るか、でも少しでも力になりたくて参加しました。微力なのはわかっていたので今回のテーマで東北の場を借りて学ばしてもらおうと言うテーマで全力で学ばしてもらおうとおもいました。また前回野球部で参加させて頂いた者は石巻から帰って来た時に何か得て帰ってきました。その時の何か得て帰るといふ気持ちを自分にはわからなくてそれを確かめてくる、そうしたいバスに乗り込みました。行きのバスでは大谷先生をはじめ、府内全域から集まった「日本を美しくする会」の皆様の自己紹介をふくまれた想いを聞かせて貰って凄く熱い話を聞いて何回も東北に足を運んでいる人は説得力があるしそれを言葉にうまく伝えるのが

凄いとバスで学びました。

次の日、宮城県に入り、石巻につくと状況は一変しました。あるべきところにあるべきものがないと言う状況を見た時にテレビで見てる光景ですが傷跡と言う生々しいものを感じました。牡鹿のボランティアセンターに着いた時そこは地平線がただただ続く光景でした。自分たちが今回ボランティアに行かしてもらった場所は水田でそこは今回初めて人が足を踏み入れて作業する場所でした。作業が始まり水田に足を踏み入れた瞬間足がはまってしまい、なかなかうまくこと作業ができずに前半は圧倒されました。

昼休憩の時になかなか作業ができない自分に本当に力になっているのだろうと考えていると凄く悔しくて何しにきたんだろうと思いました。その時に被災者の人が来てくださって話を聞いていると大切な人がここで埋まっているかもしれないと聞いて後半から体が勝手に慣れてない水田に必死になりながら動きました。でもやっぱり見つける事はできなかったが凄く周りの人と一体感が出て来たと感じました。

そしてボランティア団体が大川小学校に大型バス停めることにたいして半端な気持ちでご冥福に來られることはないですが、もし自分が逆の立場で考えると決して全て良い風に捉えることはできないと考えました。誰一人私語なく自然と

ご冥福をお祈りさせて頂きました。

帰りのバスでは今回の体験の感想を話しました。自然と自分も思い出た言葉を言いました。人それぞれ今回の体験でいろんな捉え方をされていて、終わるのに4時ぐらいかかりました。でも自分が思ったのは人間は微力なのが力を合わせた時に凄い力を発揮できること。団体と一緒に行動させてもらいたくさんの方とも知り合えました。団体の方も帰りに話していましたが日本という協力ができる国に生まれて良かったと思います。大阪に帰って来て最後に団体の皆様、運転手様には感謝の気持ちでいっぱいです。深く感じる3日間でしたが、また機会があればまた被災地に学ばせて貰いたいと思いました。ありがとうございます。

★大阪府20代 男性★

今回自分を含んだ10名が石巻に行かせて頂きました。正直ほんとにあんなにも酷いのが震災があつてから何ヶ月も経っているので、少しは良くなっているだろうと思っていました。ですが実際に行ってみると、ほとんどの家がなくなっていて空き地がずっと続いている状態で呆然としてしまいうくらい凄く、言葉に出来ませんでした。まだ誰も手をつけていない水田での作業だっ

たのですが、車があったり船があったり電化製品があったり木の上の方に布団が引っ掛かっていたりと地震だけでなく津波の恐ろしさを感じました。雨が降っていて作業しにくい状況でした。自分は最初何をしたらよいのかわからなく午前中はなかなか作業することが出来なく皆のしている姿を見て圧倒されてる感じだったので、午後からは皆で力を合わせてゴミを運ぶことが出来ました。重い物は大学生が運び、運びにくい物は皆で運ぶといった感じでやっていました。皆がやらないといけないと思う気持ちがあれば全く喋ったことがない人達とでも力を合わせて出来ると言うことが改めて感じました。

作業が終わってから仮設の商店街に行き被災者の人達の話の聞いたり笑顔を見て自分が元気を与えるつもりだったのですが、逆に元気をもらいました。その後大川小学校に行かせていただきました。誰一人として私語をすることがなくご冥福をお祈りさせていただきました。親が子供に書いている手紙とかがあり、自分はその場で呆然としてしまいました。正直何て言葉で表現したらよいのかわかりません。

今回自分は皆さんと話をしたりして何か得て帰りたいと思っていました。皆と話をすることはあまりなかったのですが何かを得たということはないのですが、改めて感じる事が出来たのは

とても良かったと思っていますし、自分は就職のことで悩んでいたのですが、ある程度どうするか決めることができたのでよかったです。本当に今回ボランティアに行かせていただき、またいい経験をさせて頂きありがとうございます。今回の貴重な経験をこれからの人生で少しでもいかしていけるように頑張っていきたいと思います。またこのような機会があれば行かせて頂きたいと思っています。本当にありがとうございます。

★★大阪府20代 男性★★

三日間宮城県にボランティア活動としていかしていたきました僕は高校が宮城県にある高校で大阪に帰ってきた瞬間に地震がおきました。その時はあまり実感はわかずこれほど大きな事になるとは思いもしませんでした。次の日からテレビがすべて地震のことになり宮城の友達に電話をしてもまったくつながりませんでした。段々不安になり心配が大きくなりました。一番最初に電話が繋がったのは1ヶ月後でした、命は無事でしたが家が流されたという友達もたくさんいました。そういう話を聞いていると自分は普通に生きて普通に野球をやっているのだからかという気持ちになりました。それでも宮城県の人達は皆元気で逆に力をもらいました。

バスに乗り宮城県まで向かう中一人一人自己紹介がありました、ほとんどの方が小学校や中学校の教師の方で皆様の話を聞いていると誰一人として中途半端な気持ちで来ている人はいないと感じました。逆に被災地のためにという強い気持ちを持った人ばかりでした。

宮城県につき作業にとりかかるまえの状況は悲惨なものでした。車が逆に向いたり船が陸まで飛んできてたり普通じゃないことが当たり前のようになっていました。あまりの悲惨さに言葉を失い頭が真っ白で必死に作業にとりかかっていました。僕は学生でましては野球をしていて体力は普通よりあるはずですがそれより大人の方の方が必死に動いていました。その姿に心が打たれました。バスでの自己紹介の時の思いは本間なんやと思えました。その姿を見ることができてまだまだ頑張れました。

作業が終わって大川小学校にいきました。ほとんどの小学生が亡くなったとききました、小学校の前にお墓があり母親からメッセージが書いてありました、その中でも1つに残る言葉がありました。それが「いつか夢でもいいから会いたい」という言葉です。なにか言葉では表せない気持ちになってしまいました。もし僕が母親の立場になっていたら今頃生きているのかと考えるとどうかな、という思いになりました。小学生という若

い歳でこの世をたち、やりたいことができず死んでしまう子供のことを考えると、もつと必死に生きなければという気持ちになりました。

帰りのバスでは一人一人が感想を話しました。中には涙を流す人達がいて僕もこらえるのがやっとでした、このボランティアにける思いは半端なものではないとあらためて感じました。この三日間で色々な人に出会い色々な経験をさしていただきました。皆様のことを尊敬できました話を聞いたりしたいと本当に思いました。この経験は絶対に無駄にはならないと思います、この気持ちを知らない人に一人でも多く伝えていきたいです。被災にあった人達のぶんまで精一杯生きていきます。また機会があればいかしていただきたいです。この三日間は僕の最高の経験になりました。ありがとうございます、そしてまたよろしくお願ひします。

★★大阪府20代 男性★★

今回は、ボランティアに行かせていただきありがとうございます。僕は前々から、震災のボランティアには行きたかったです。今回のボランティアは自分の人生に大きな影響を与えたと思います。東日本大震災のような大規模なボランティアは自分の人生ではあるかないかに近いぐらい

の震災で、喜んではいけません、とてもいい経験をさせていただきました。

夜の7時に尼崎駅を出て正直、石巻市に着くまでは日本ではないと思っていました。ですが、石巻市に着いて本物の光景を目の当たりにした時は本当に声も言葉も出ませんでした。「もし、自分たちがこうゆう震災に出会ったら、いつたい自分たちはどうしたらいいんだろう。」と、ボランティアをしている間ずっと考えていました。

石巻市に着き、ボランティアをする場所が田んぼのはずが泥だらけの広場になっていました。それだけではありません。目の前にはトラックや大きな船が裏返っていました。活動を始めて、いろいろなものが出てきました。拾っている中で強烈な印象がある物があります。一つは結婚披露宴のビデオ。もう一つは犬の死体でした。結婚披露宴のビデオは人生で「つしかなない宝物を津波によって流されてしまい、思い出が全て流されたと思うと、今でも強烈な印象が残っています。犬の死体は逃げ遅れた犬がただだけ苦しい思いをしたかを考えてしまいました。犬も人間と同じで命がある生き物です。苦しい思いをして死んでしまったと思います。

作業をしていて、休憩をしていると、奥さんがまだ見つからない旦那さんがボランティア活動をしている僕達に奥さんが見つからない

と言って、この辺にいる可能性があるといわれ僕はその時に背筋がぞくつとしました。ですが、僕は見つけてあげたいと思いました。本当にかわいそうだと思います。自分がそういう風な立場にたった時に絶対にさみしいと思いました。一日でなにもかもが流されて、本当にかわいそうだと思います。早く奥さんが見つかって欲しいです。

作業も終わり、帰りによつてもらった大川小学校の雰囲気は凄かったです。言葉ではどう表したらいいかわからないです。正直、現地に行つてあの雰囲気を感じて欲しいです。ですが、学校の建物は津波によつて中は潰れてしまいました。建物自体は潰れていませんでした。僕は、建物が潰れなかったのはこの震災を忘れずにいないで欲しいという思いが建物が伝えたのだと思いました。ですが、これは僕が感じた事です。みなさんが感じた事は、違いかもしれません。ですが、僕はそう感じました。二度とこういうことが起きないようにと。

僕たちは被災者の方に元気を出してもらおうと思つてボランティアに行きましたが、帰りの仮設商店街ではラーメンを食べていたら、「ありがとうございます」とか「苦労様」と言われ、気持ちがすつとぐく楽になりました。僕たちがそういう風に被災者の方々に伝ええないといけないはずなのですが、僕たちが気持ちを楽にさせていただきました。

この東日本大震災のボランティアは自分の人生のかけがえのない経験ができたと思えました。ですが、僕はプライベートでもボランティアに行かせていただきたいと思います。今回、ボランティアに行かせていただいた事に感謝しています。いろいろお世話になった方にはこんな自分を連れて行ってもらえた事に本当に感謝をしています。東日本大震災の復興を心から応援をしています。また、ボランティアの方に行かせていただきます。今回は本当にありがとうございました。心より感謝、そして、応援をしております。

★★大阪府10代 男性★★

今回被災地に学ぶ会に参加させて頂きました。自分は高校を卒業してから約8ヶ月ぶりに東北に行きました。個人的には「被災地から学ぶ」ではなく、高校3年間お世話になった東北に少しでもいいので「恩返しをしたい」という強い願望で参加させて頂きました。テレビを通じての映像を見ていましたが、自分の肉眼で最後に見た光景とは全く違い、中々現実を受け止めませんでした。普段何気なく見ている建物がなかったり、何か空気が重かったりと、当たり前のような景色がありませんでした。自分にとっての東北で過ごした3年間はとても大きな財産であり、その光景を目に

した時は今までのものを全て失った気持ちになりました。その絶望感の中、バスが作業場所に着いた時に、やつとこの現実から逃げずに受け止めないといけないと覚悟が決まりました。この長い人生辛いことはたくさんあると思いますし、それを受け止めるしかないと思いますし、現に被害を受けた人達は今は前を向いて一歩ずつ一歩ずつ希望に向かって進んでいるのに、自分だけうちひしがれている訳にはいきませんし、少しずつ受け止め作業をさせて頂きました。

自分達が作業をした水田は全く手がついておらず、何かの大きな機械やとても大きく立派な船車など、普通ではありえない物がその水田に流されていきました。地震だけでなく津波の怖さを実感しました。やはり水田なのでグチョグチョの中に入って作業をするとなつて少し抵抗があったのですが、「自分は何の為に来たのか」と考えた時に、自分のちつぽけな考えの未熟さに気付かされました。作業をしている時には、がむしゃらになつて作業をするのも良いと思うのですが、自分は高校でお世話になった人達に対しての感謝の気持ちや、今まで全国制覇を目指して苦しい時も一緒に過ごしてきた仲間の事を思い作業をしました。すると気が付いたら、先程自分の中にあつた邪念がなくなり、感謝の気持ちでいっぱいでした。そして作業の途中に布川さんという以前、この水

田の近くに住んでいたのですが、津波の影響で奥さんが行方不明になり、家を失い、全てを失ってしまったと話をされ、そして手がかりになる物を探しているとおっしゃっていて、少しでもという気持ちで探させて頂いて、布川さんの物かは分かりませんが、いろんな生活用品や結婚披露宴のビデオが出てきたりしました。その物一つ一つには思いがこもっているように感じました。少しでも見つかって良かったと思います。そして自分達大阪だけでなく埼玉の人達や海外の人達も来ていて、初めて会った人達なのに思いは一緒なので気が付いたら一つのチームになっていました。大行列を作つて、バケツリレー形式で運んだり、誰かが気を使って草などで足場を作つたり、一人一人の力は小さいですけど、みんな同じ方向を向いてやつた時の力はとてもすごく、最初見たときの水田はどつから手をつければいいのか分からないぐらいひどかつたのに、作業を終えて見た時にとっても綺麗になつていてとても嬉しかったです。日本人の力のすごさを感じましたし、とても感動しました。

作業を終えてからは、大川小学校に行きました。最初暗くてよく見えなかつたのですが、バスのライトが当たつた瞬間、言葉で表せないぐらい悲惨なことだと分かりました。今まであんな光景を見たことが無かつたので少し気持ちの整理が出来

ませんでした。その後黙祷を捧げ、御冥福をお祈りさせて頂きました。その慰霊碑の所には、両親から子供に書かれた手紙があり読ませて頂き、込み上げるものがありました。地震が来る前までは毎日楽しく過ごしていたと思いますし、まだまだいろんな事もやりたい事があつたと考えると本当に辛くなりました。この子供達の事を考えると、自分達は今好きな野球をしています、野球が出来る事は当たり前ではありませんし、大袈裟に言う生きているのも当たり前ではないと思います。だから当たり前のようにしている事は当たり前ではありませんし、感謝の気持ちを持つべきだと思います。本当に自分達が今するべき事は、一瞬一瞬を大切に生きる事だと思います。

そしてこうしてこの「被災地に学ぶ会」を通じて出会えたメンバーとの出会いを大切にしたいと思えます。今回でも高校の時の監督さんの大学の時代の友人に出会ったり、人との縁の素晴らしさを感じました。そして高校の時の監督さんがよく言っていた言葉は「人は会うべき人に必ず会わされる。それも一瞬早過ぎもせず、遅過ぎもしないときに。」という言葉の通り今回のメンバーは、自分にとって必要であり、早過ぎもせず、遅過ぎもせず、このタイミングで会わないといけないから会わされたのだと思います。だからこれは偶然ではなく必然だと思っています。人との縁に改め

て感謝をしたいと思えます。

この「被災地に学ぶ会」に参加させて頂いて本当にたくさんの事を学ばさせて頂きました。まだ東北には全然恩返しが出来ていないのでこれからまた機会があれば参加させて頂きたいと思えます。本当に有難うございました。

★★大阪府10代 男性★★

今回は色々な方々の御厚意、協力のおかげで宮城県に行かせて貰うことが出来ました。ボランティアに行かせて頂くのではなく、学ばせて頂く事なんだということをしつかり認識し、この会に参加させて頂きました。

まず行きのバスの中では、大谷先生始め、宮崎監督や色々な先生方、又は社会で活躍しておられる方々の自己紹介を始め、御言葉を聞かせて頂きました。やはり自己紹介や御言葉を聞いていると、素直に大人の人は凄いなと親身に感じました。そんな中で宮城県に着いて、被災した風景を見ました。正直言葉を失いました。同じ日本とは思えない風景が辺り一面に広がっていて、人も誰一人と歩いてなく、その時初めて今回の自然災害の大きさに気付きました。

そういった心境の中、水田で活動させて頂きました。しばらく拾っていくと、凄く高い10メー

トルぐらいある木に布団が引っ掛かっていました。その光景を見た瞬間、どれだけの津波がこの町を襲ったのが、身体全体に伝わってきました。それと同時に鳥肌が立ったのを覚えていきます。そういった事を感じながら物を拾っていくと、気付いたら身体中泥々になりながら、色々な方々と協力して作業をしている自分がいました。最初は酷かった水田も、気付いたら草木も無くなり物も集められ違った風景が目映りました。この瞬間これがチームプレーなんだと言うことが初めて深い意味で実感できました。こういった事は野球にもつながってくる事だと思うので、この経験を活かしていくべきだと素直に思いました。

また機会があれば12月の2日〜4日の期間に行かせて頂く事ができると伺ったので、もし行く事になったらもっと色々な事を学んできたいと思っています。それとまだ一回も行った事の無い人は絶対に行った方が良くと思います。言葉では上手く伝えられませんが、行けば絶対に分かります。自分はそのおかげで色々な事に気付かせて頂く事が出来ました。今回は色々な方々の御協力のおかげで参加させて頂いた事を非常に感謝しています。ありがとうございました。

★大阪府20代 男性★

私がこの会に参加するきっかけとなったのは友人の一言であった。実際に東北に足を運び被災地から学ぶという内容であった。自分自身大谷先生との繋がりがなかったが、新聞やテレビといった角度ではなく実際に被災地を目の当たりにしたため、少々強引ではあったが連絡を取った。先生の厚意により参加することが出来たことをありがたく思った。

被災地に行く前にバスの中での自己紹介時、大人の方々はこれまでに実際に被災地に行つて感じたこと等を多々話してくれた。被災地に行きそこで感じたことが私生活に関わっている人が大半であった。その中でも「傲慢と謙虚」の話は印象的であった。その人は「傲慢と謙虚は対極にある」と考えていたが、「被災地で自分を見つめなおし気付いた」と言った。「自分が傲慢であると気付いた時に謙虚になれる。傲慢と謙虚とは案外近い言葉なんだ」と言っていた。私はこの話を聞き自然と共感出来た。それ程説得力のある言葉であった。

被災地に行つた第一印象は、「8カ月経つた今でもこの状態か」と思った。津波の凄さがひしひしと伝わった。実際現場に行き瓦礫を撤去する際「瓦礫やと思わんといってくれ。それは誰かの大事な物やつかもしれんから。」と言われた。そ

の言葉が凄くわかつた気がした。私達の他にも埼玉や東京、中には集団ではなく、個人的に足を運んでいる人もいてびっくりしたと同時に自分の甘さを知った。作業をしている途中物を引っ張り上げる時重たくて中々動かなく困っていたら、周りの人が何も言わず当り前のように手伝ってくれた。言葉で言われずとも背中を押してくれた瞬間であった。私は頑張ろうと強く思った。

大川小学校に行つた際、祭壇に母から子へのメッセージが綴つてあつた。母の真つすぐな気持ちがかかれていた。私は生きる大切さを感じ、生きていることに感謝しないといけないと強く思った。

この被災地に学ぶ会に参加して、具体的に何処が変わつたとはまだ言い切れない。これからの生活で気付ければ良いと私は思う。この会に参加出来たことは私にとつて凄く良い経験となつた。ありがとうございました。

〈この文を読んでくれた方々へ〉

東北は、はつきり言つてまだまだ復興は出来ない状態にあります。被災地に行ければ理想ではありませんが、時間や経済的な理由からも足を運ぶことは困難だと思います。私達誰もが出来ることは東北を思うことであると思います。そうすることが復興の第一歩だと私は思います。日本全国が同じ所に目を向ければ絶対復興すると私は信じて

ます。日本は強いです。コンビニ等の些細な募金でも良いので協力してあげてください。そして、この話を一人でも多くの人が読んでくれることをありがたく思います。

★兵庫県40代 男性★

牡鹿ボランティアセンターの近くに、障がい者福祉施設「くじらのしっぽ」があることを教えて頂きました。そこでパンを焼いて販売していることです。直接連絡をし、私たちのお昼ご飯用に、事前にパンを100個焼いて頂けることになりました。その施設に通う人たちも、みんなが被災されています。いろんな想いを持って焼きあがつたパンを、かみしめながら食べさせて頂いた時、なんとも言えない感動の味がしました。泣きました。素材にもこだわつていて、味も格別です。一気にファンになりました。

今回、最も印象に残つたのは、大川小学校の慰霊碑を照らすライトです。日没時間も早くなり、私たちが大川小学校へ到着した時には、すでに辺りは真つ暗でした。一帯はまだライフライン（電気、水道、ガス）が通っていません。しかしながら、2基のライトが慰霊碑の辺りを照らしていました。太陽光発電のライトをおそらく子ども達の遺族の方が設置されたのだと拝察しました。

あの暗闇の中の光は、犠牲になった子ども達の輝きに見えました。昼間蓄えられたエネルギー（子ども達の光）を、親御さんがライトを通して輝かせてくれているように感じました。そして、その光は、慰霊碑（自分たち）に向けられているのではなく、お参りにきてくれる人に向けられています。それは、「自分自身が持っている力は、人の役に立つために使うのだよ」と私たちに教えてくれているようでした。真つ暗闇の中の一つの光から生き方を学ばせて頂きました。ありがとうございます。